

# 博 多 142

－博多遺跡群第188次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1125集

2 0 1 1

福岡市教育委員会

## 序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する博多遺跡群第 188 次調査の発掘調査報告書は共同住宅建築に伴う調査成果についての記録です。この調査では古墳時代から近世まで連綿と続く集落を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2011 年 3 月 18 日

福岡市教育委員会  
教育長 山田裕嗣

## 例 言

- 本報告書は博多区冷泉町 86 番地、87 番地、88 番 2 の共同住宅建設に伴って 2009 年 2 月 24 日から 4 月 15 日にかけて発掘調査を行った博多遺跡群第 188 次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。
- 遺構・遺物実測、遺構・遺物の写真撮影は屋山が、遺物実測は濱石正子が、製図は熊谷幸重が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- 貿易陶磁の分類は大宰府条坊跡Ⅹ－陶磁器分類編－(2000 年)太宰府市教育委員会を参照した。

遺跡調査番号	0860	遺跡番号	020127	分布地図番号	天神 49
調査地地番	福岡市博多区冷泉町86番地、87番地、88番2				
開発面積	195㎡	調査面積	112㎡	調査原因	共同住宅建設
調査期間	20090224～20090415		担当者	屋山 洋	

# 博 多 142

—博多遺跡群第 188 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 1125 集



遺跡略号 HKT - 188

調査番号 0860

2 0 1 1

福岡市教育委員会

## 本文目次

I	はじめに	1
II	調査の記録	3
1	調査の経過	3
2	遺跡の概要	3
3	遺構と遺物	6
1)	溝	7
2)	井戸	10
3)	土坑	14
4)	その他の出土遺物	27
4	小結	27

## 挿図目次

第 1 図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
第 2 図	調査地点位置図 (1/4,000)	2
第 3 図	調査範囲図 (1/200)	3
第 4 図	調査区第 1 面全体図 (1/60)	4
第 5 図	調査区第 2 面全体図 (1/60)	5
第 6 図	調査区第 3 面全体図 (1/60)	6
第 7 図	溝実測図 (1/40)	7
第 8 図	SD1021 出土遺物実測図 1 (1/3)	8
第 9 図	SD1021 出土遺物実測図 2・SD1024 出土遺物実測図 (1/3)	9
第 10 図	SE1019 実測図 1 (1/60・1/3)	11
第 11 図	SE1019 実測図 2 (1/3)	12
第 12 図	SE1019 実測図 3 (1/3)	13
第 13 図	SE1053 実測図 1 (1/60・1/3)	15
第 14 図	SE1053 実測図 2 (1/3)	16
第 15 図	SE1053 実測図 3 (1/3)	17
第 16 図	SE2017 実測図 1 (1/60・1/3)	18
第 17 図	SE2017 実測図 2 (1/3・209 は 1/4)	19
第 18 図	土坑実測図 1 (1/40)	20
第 19 図	土坑実測図 2 (1/40)	21
第 20 図	土坑出土遺物実測図 (1/3)	22
第 21 図	SK2001 出土遺物実測図 (1/3)	23
第 22 図	SK2001・3021 出土遺物実測図 (1/3)	24
第 23 図	SK2029 実測図 (1/40・1/3)	25
第 24 図	包含層出土遺物 (1/3)	26

## 図版目次

図版 1	1. I 区 1 面 2. I 区 2 面 3. I 区 3 面 4. II 区 1 面 5. II 区 2 面 6. II 区 3 面	28
図版 2	1. SE1019 2. SE1019 竹筒痕跡 3. SE1053 4. SE1053 土層 5. SE1053 井筒下層遺物出土状況 6. SE2017	29
図版 3	1. SK1002 2. SK1020 3. SK1020 土層 4. SK1054 5. SK2009 6. 調査区南壁土層	30
図版 4	1. SK2001 2. SK2001 土層 3. SK3003 4. SK2029 5. SK2029 土層 6. SK2029 遺物出土状況	31
図版 5	1. SK3006 2. SK3018 3. SK3021 4. SD1021 5. SD1024 6. 調査区東壁土層	32

# I. はじめに

## 1 調査に至る経過

平成 20 年（2008 年）10 月 22 日付けで株式会社第一双葉から福岡市教育委員会埋蔵文化財第 1 課に福岡市博多区冷泉町 86 番地、87 番地、88 番 2 の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書（20 - 2 - 580）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財である博多遺跡群の中に位置するため、埋蔵文化財第 1 課では遺構の有無の確認が必要と判断し、2009 年 2 月 12 日に重機による確認調査を行った。その結果、現地表面から深さ 2.0 m までは近現代の攪乱で、その下に厚さ 70 cm 程の古墳時代～中世の包含層と遺構が確認された。この調査結果と建設予定建物の基礎設計を照らし合わせたところ、計画されている建物基礎では遺跡の破壊が避けられないため、建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を図ることが必要であると判断した。その後は建主の西京ホンダ販売株式会社を委託者として協議を行って合意を得たため、平成 21 年（2009 年）2 月 24 日から 4 月 3 日の期間で発掘調査を行った。調査期間中は表土の場外搬出などで原因者及び関係者各位の多大な御協力を得た。記して感謝したい。

## 2 調査の組織

調査主体 教育委員会文化財部埋蔵文化財第 1 課

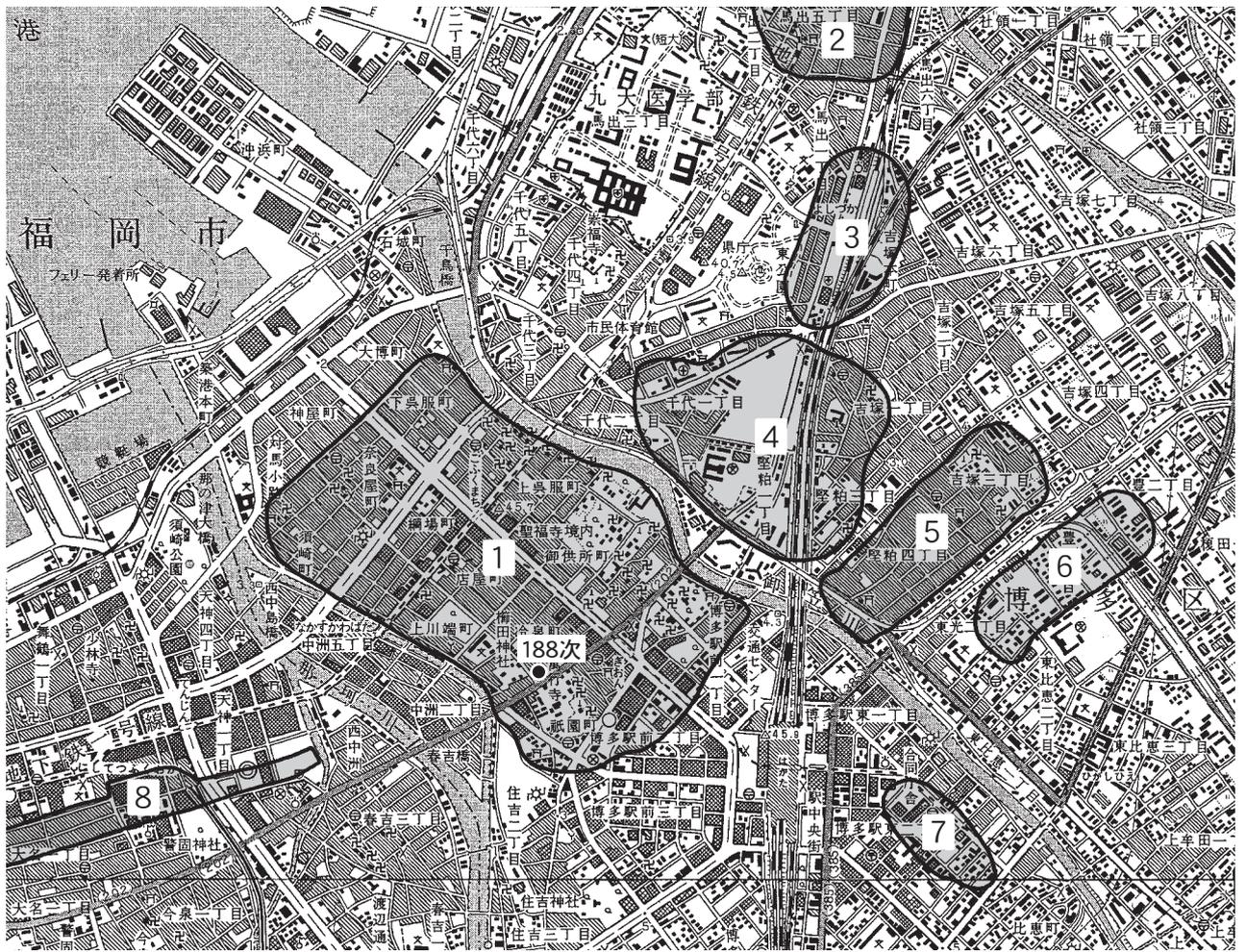
埋蔵文化財第 1 課課長	（前）山口譲治（現）田中壽夫
調査係長	米倉秀紀
調査庶務	古賀とも子
調査担当	屋山 洋

作業員 石田和子 岩崎良隆 岡部安正 荻野須美子 片岡武俊 河原明子 桑原美津子 近藤末孝  
崎山幸義 指原始子 鈴木哲夫 鈴木誠 関哲也 芹川淳子 尊田絹代 堤正子 遠山勲 豊田忠一  
中村健三 夏秋弘子 二宮千佳子 原勝輝 吹春憲治 増田ゆかり 御手洗史子 吉田哲夫  
整理作業 大石加代子 熊谷幸重 藤野洋子

## 3 立地と環境

博多遺跡群は那珂川と御笠川によって運ばれた土砂によって形成された砂丘上に位置する。砂丘は大きく南北 2 つの砂丘に分かれるが、北側を中世の呼び名を元に沖ノ濱、南側を便宜上博多濱と呼ぶ。内陸側の博多濱では弥生時代以降連続と集落が営まれるが、7 世紀には方 1 町の官衙が築かれ後世の貿易都市としての芽生えが始まる。その後 13 世紀中頃には砂丘を縦断するメインストリートができ、それを軸にした街区が形成され、博多遺跡群は都市としての景観を持ち始めることになる。

今回報告する 188 次調査は南側の博多濱の中でも南西端部に位置しており、博多遺跡群でも古い時期の遺構が分布する地域である。周辺の調査では西側隣接地の 118 次調査で弥生時代前期の甕が出土しており、その他にも弥生時代中期の壺が出土している。弥生時代の後期後半になると 118 次で竪穴式住居の残欠と思われる掘り込みが検出されている他、古墳時代前期では 63 次調査で竪穴式住居が検出されており、二重口緑壺や小型丸底壺、高坏などがまとまって出土している。この時期になると、今回の 188 次調査やその周辺の調査区においても遺物が多く出土する様になり、博多濱南西部に集落が広がったと思われる。古墳時代後期になると遺物の出土は少なくなるが、8 世紀になるとまた遺物が増加し、118 次調査では 3 基の甕を連結させた甕棺墓が出土するとともに、円面硯や皇朝十二銭の一枚「隆平永寶」（初鑄 796 年）が出土するなど官衙に関連する遺物が出土するようになる。

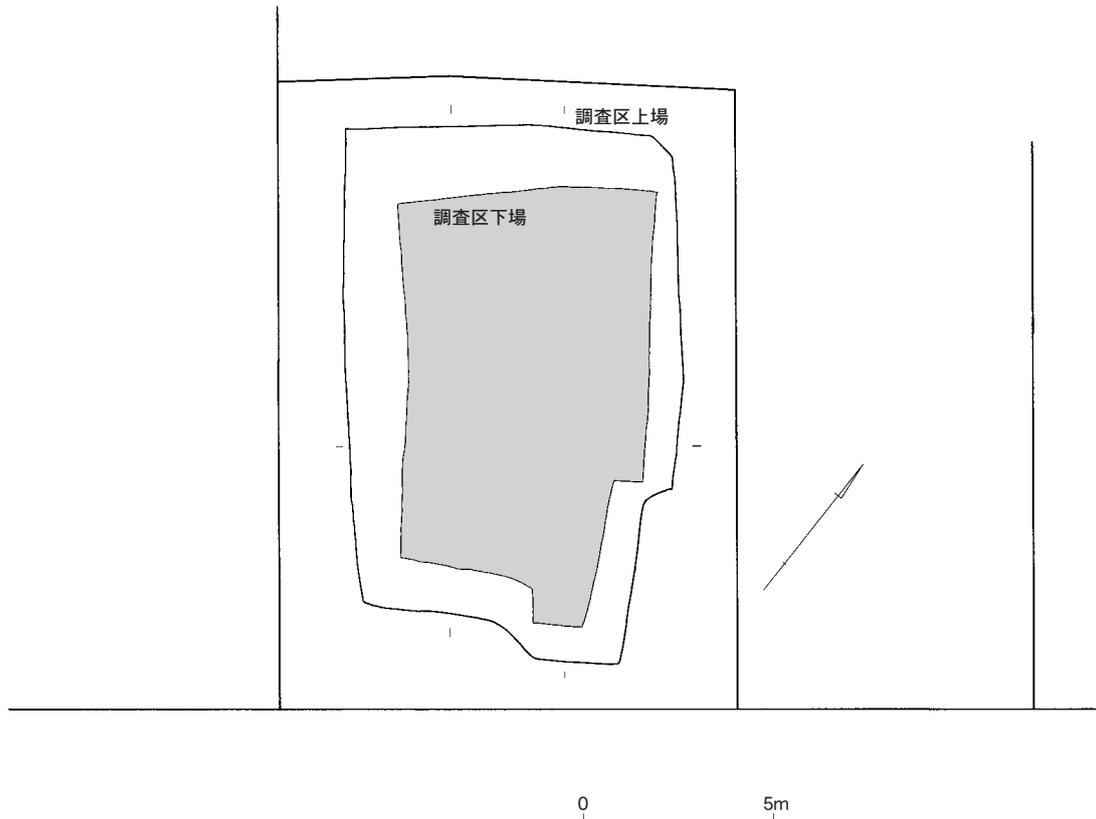


- 1. 博多遺跡群
- 2. 箱崎遺跡
- 3. 吉塚本町遺跡
- 4. 堅粕遺跡
- 5. 吉塚遺跡
- 6. 豊遺跡
- 7. 駅東生産遺跡
- 8. 福岡城肥前堀

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点位置図 (1/4,000)

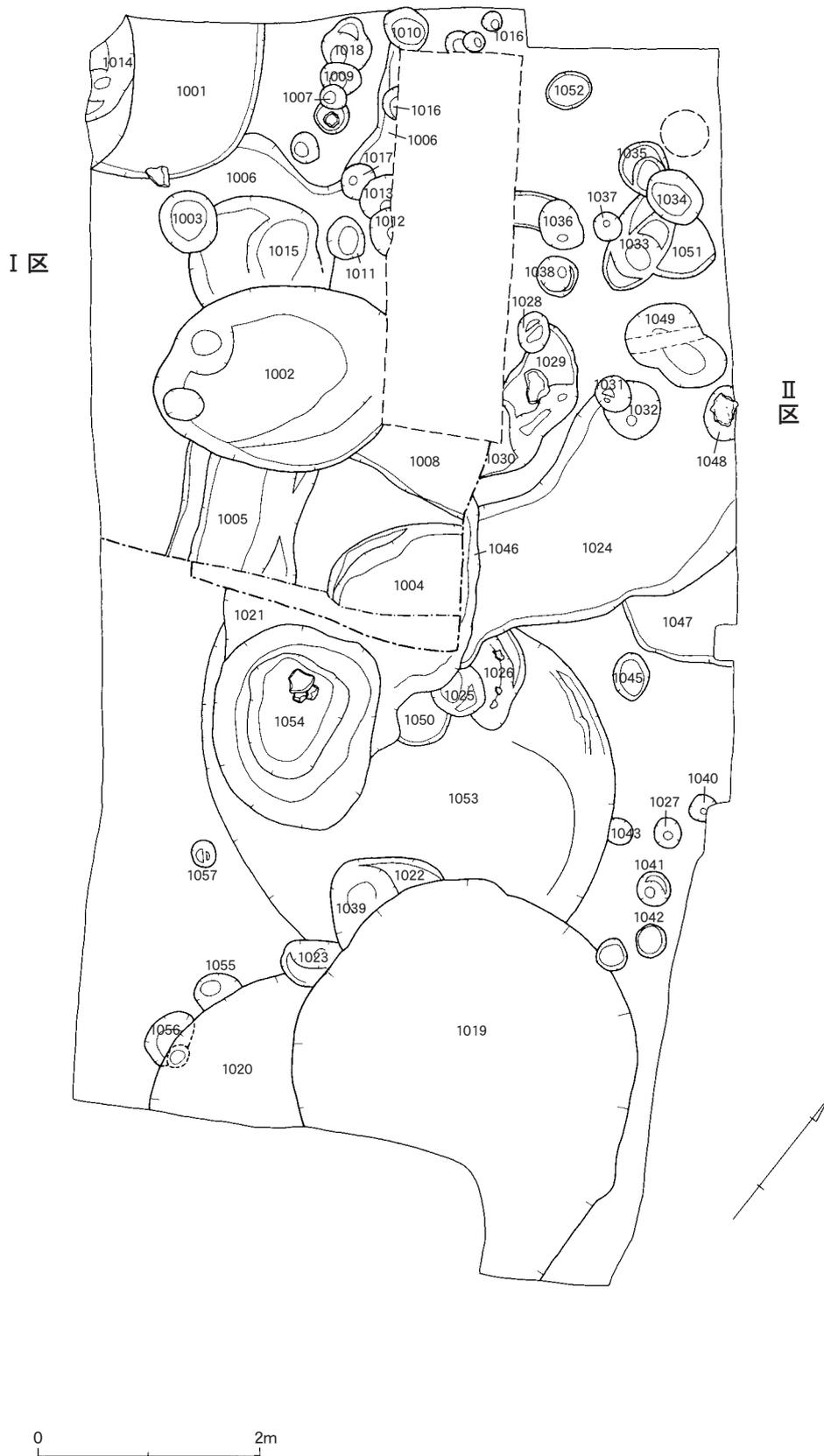


第3図 調査区範囲図 (1/200)

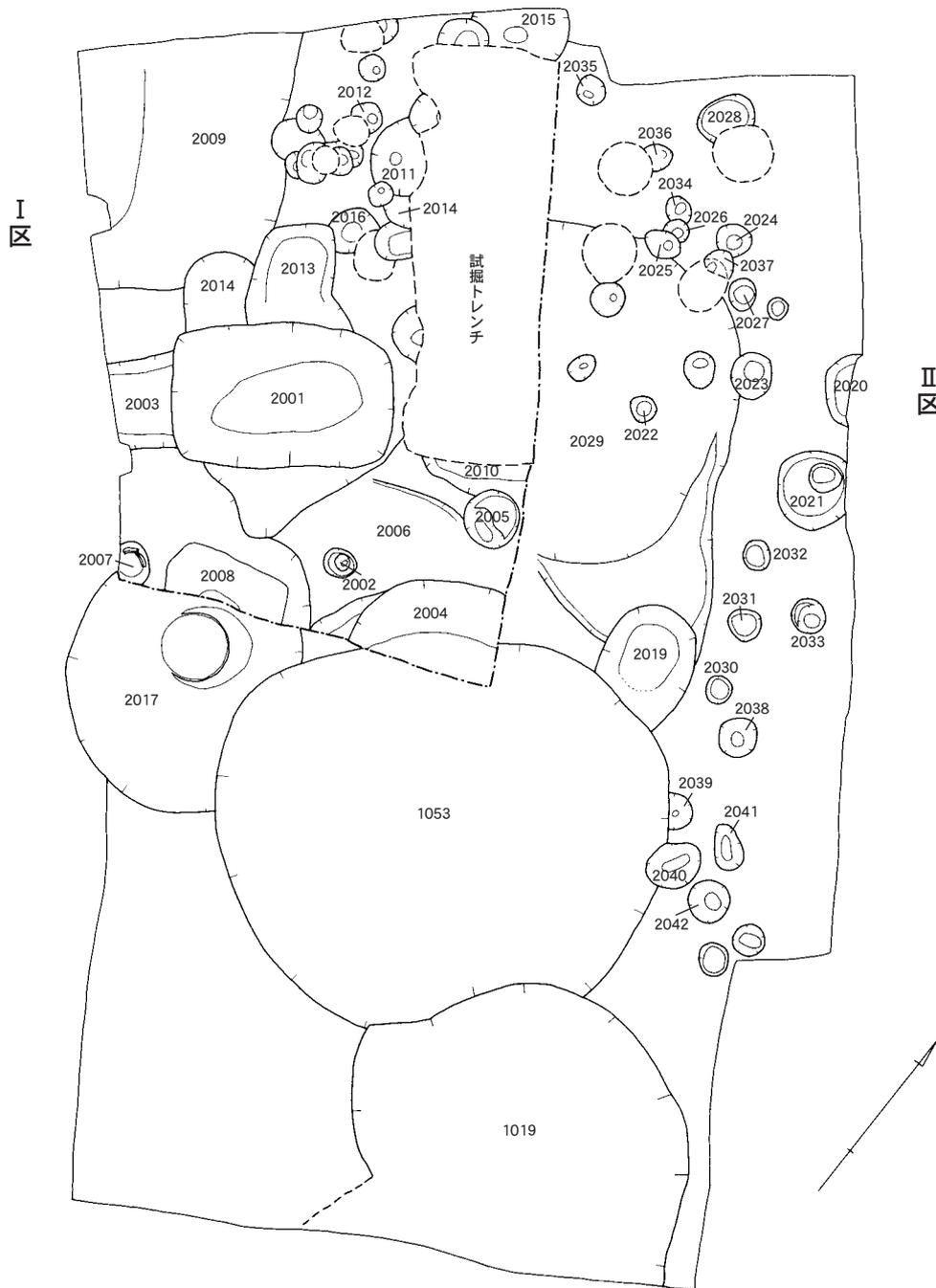
## II. 調査の記録

### 1 調査の経過

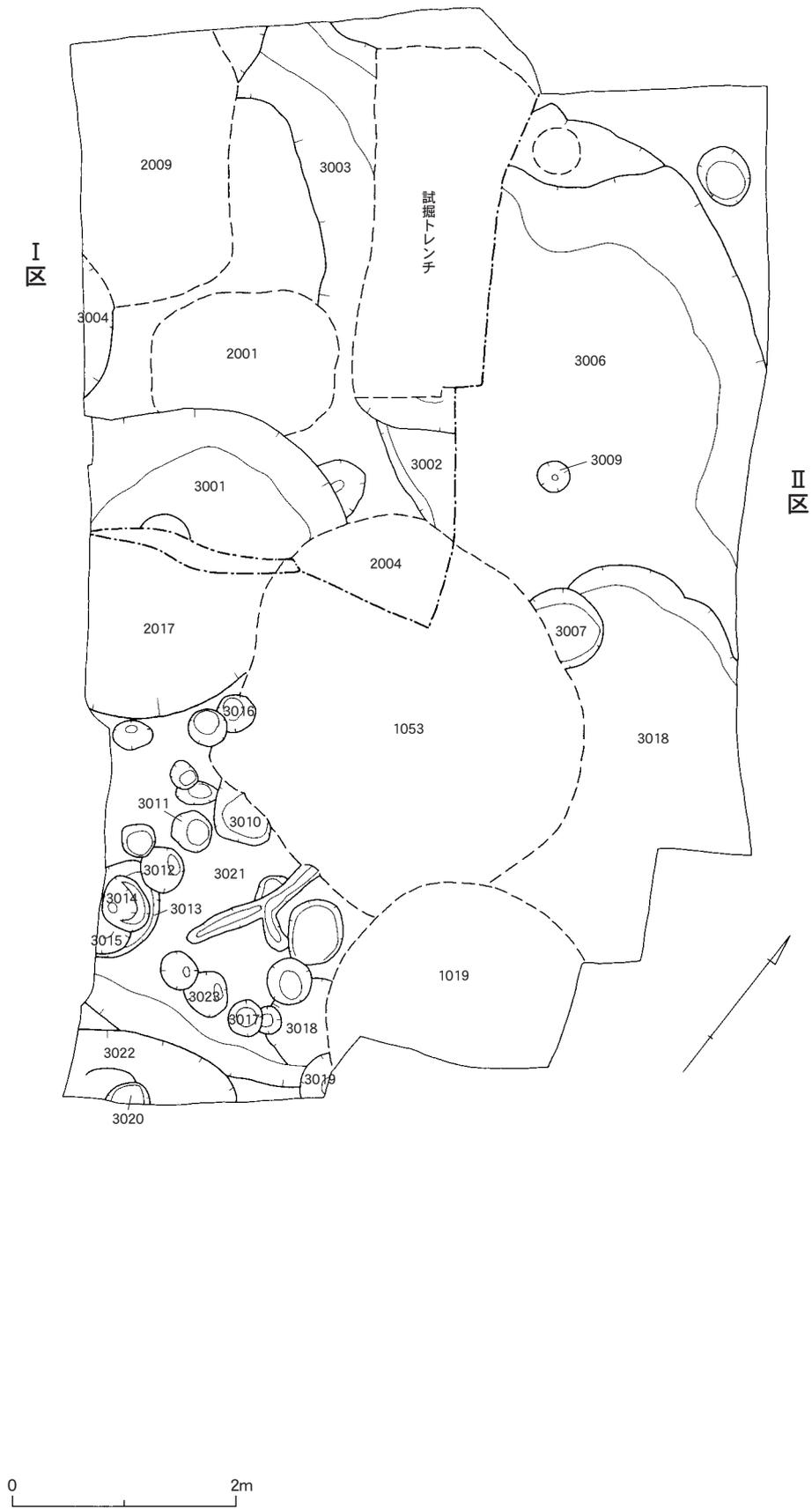
申請地の面積は195㎡である。敷地全体が調査対象であるが、境界近くの壁が崩壊する可能性を考えると敷地全体を調査することができず、敷地の周囲に1m程の残地を設けて中央部の発掘調査を行うこととした。調査では現地表面から最終調査面である砂丘面までの深さが2.8mと深く廃土が多量にでることが予想されたが、廃土を場外搬出することができないため、調査区をI～IV区に分割して北西端のI区の表土のみを場外搬出し、あとは1/4ずつ発掘調査を行って廃土は残地に置くこととした。その後2月19日に原因者側によるI区表土の場外搬出が終了したので、2月24日に調査機材の搬入を行い調査に着手した。調査は確認調査の結果を受けて以前の建物の基礎などで攪乱されている地表面から2mの深さまでを重機で掘り下げ、標高3.7mを第1面に設定して、遺構検出と掘り下げを行った。その後、3月3日に第1面の調査が終了し、手掘りで標高3.3mまで40cm掘り下げて第2面の調査を行い、第3面目は3月6日に標高3.0mの砂丘面上まで掘り下げて調査を行った。I区の調査中に原因者側からII～IV区の表土を場外搬出するとの申し出があり、I区の調査終了後の3月10日から12日にかけてI区の廃土とII～IV区の表土の場外搬出を行い、II～IV区をまとめてII区として3月16日から調査を再開した。II区の調査時には、調査が終了したI区を足場板で囲って廃土置き場とした。発掘調査は4月3日の午前中に終了した。午後から機材を搬出しその後15日まで土器洗いを行った。今回の調査では敷地全体の195㎡が調査対象であったが、周辺に約1mの足場を残し、法をつけて掘り下げた結果、調査面積は掘方上面で112㎡、下場で68㎡となった。



第 4 図 調査区第 1 面全体図 (1/60)



第5図 調査区第2面全体図 (1/60)



第 6 図 調査区第 3 面全体図 (1/60)

## 2 調査の概要

今回最も古い遺物は、弥生時代中期の土器片が数点出土したが遺構には伴わない。遺構に伴う可能性があるのはSX3003から出土した古墳時代前期の土師器片であるが、後述するようにSX3003が自然の窪みである可能性があり、確実な遺構としては10世紀後半から11世紀前後の土坑が最も古い遺構となる。10世紀後半から11世紀前半の柱穴も検出されているが、遺構の密度は薄い。遺構の密度が濃くなるのは11世紀後半の博多遺跡群が大陸や国内の交易によって発展し始めた時期で、越州窯系青磁碗や白磁碗Ⅳ類が多く出土する。検出した中世の遺構は井戸、土坑と柱穴群などである。

近世末～近代にかけて188次周辺では窯業生産が行われていた。特に調査区の東～北側隣接地では博多人形の製作が行われており、118次調査では生産関連の遺物も出土している。今回の調査では近世から近代の遺構は多いが、窯業生産に関連すると思われる遺物は確認できていない。

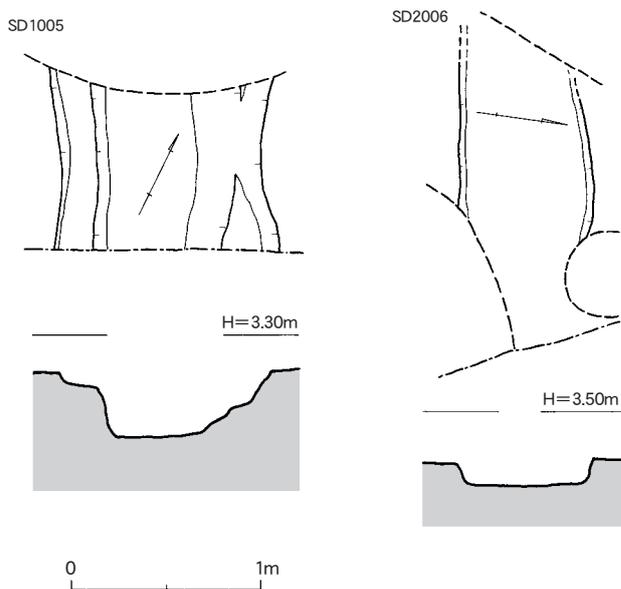
## 3 遺構と遺物

1) 溝 調査区内で7条検出した。溝は1005と2003は直線的であるが、他の溝は蛇行しており幅も一定ではない。本調査区の西側に隣接する118次では、東西方向の溝(SD024)から土師坏・皿が大量に出土して鎮西探題との関連が言及されている。今回の調査ではこの溝の続きが出土するのを期待したものの、調査区内では出土しなかった。

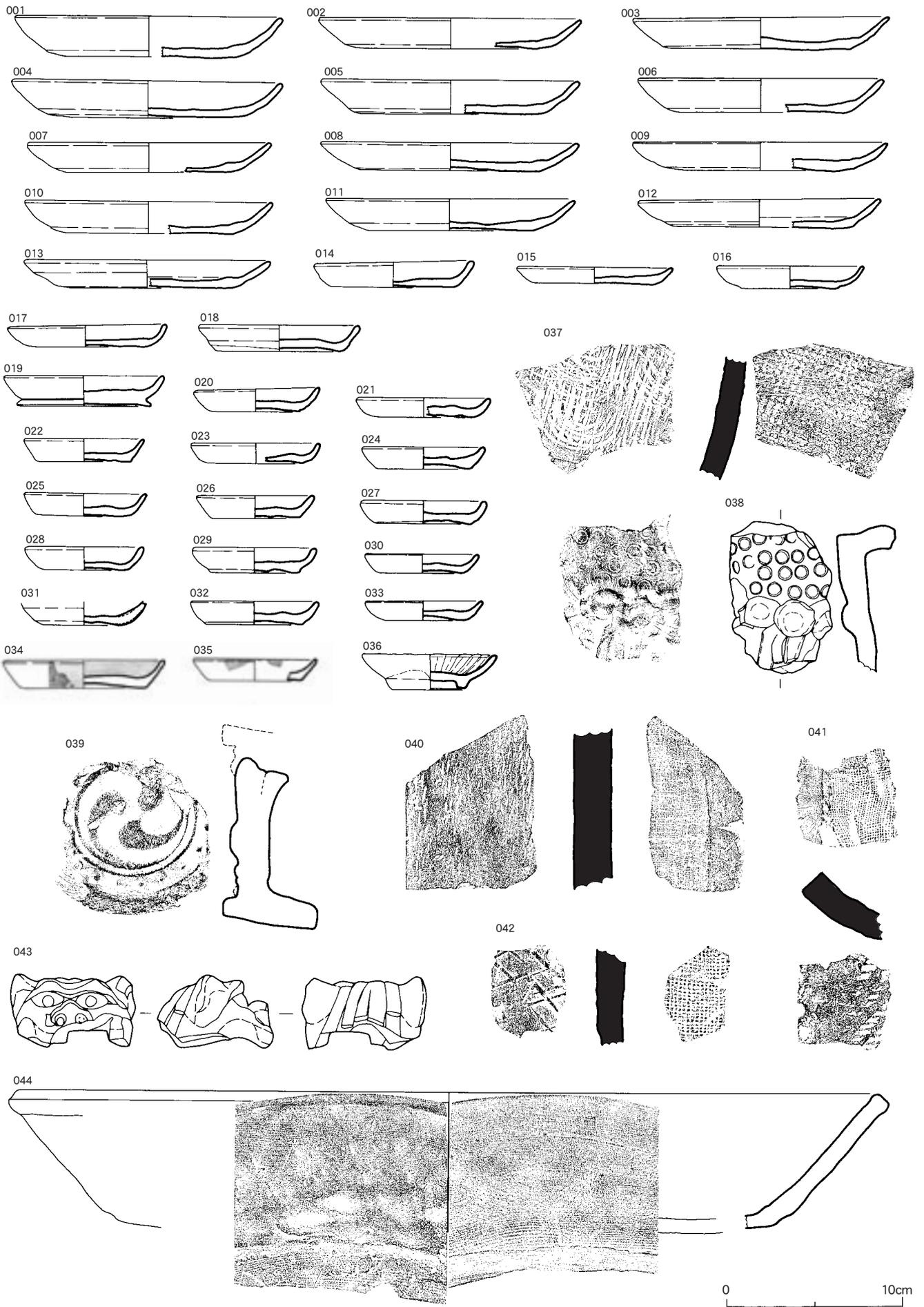
SD1005 (第7図) 第1面の中央西側に位置し、北側をSK1002、南側をSK1054に切られる。主軸をN-27°-Eに取り、幅は1.2mを測る。SK1002の北側と1054の南側で溝の続きが確認されてないため、溝ではなく若干細長い土坑の可能性もある。現状で検出面からの深さ37cmを測り、東西両側にテラスをもつ。埋土は茶褐色を呈し、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類や白磁皿Ⅵ類、陶器鉢Ⅰ類などが出土した。土師坏は糸切り、ヘラ切り両方が出土している。12世紀中頃と思われる。

SD1006 (第4図) 第1面の北端部に位置する。SK1002の北側に位置しており、SD1005の延長にも見えるが、SD1005とは異なり蛇行することから、別の遺構と考えて分けて報告する。試掘トレンチや後世の遺構によってかなり破壊されていて明確な平面形は不明であるが、東西方向の溝とそれから西側に分岐する溝に見える。検出面からの深さが9cm前後と浅く、底面が平らで平面形も不正形であるため、溝ではなく整地層などの可能性もある。出土した遺物は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類や白磁碗Ⅳ類など11世紀後半から13世紀頃の遺物が多い。1点だけ近世の可能性のある陶器片が出土しているが、直上の近世の掘り込みからの紛れ込みと考えると、遺構の埋没時期は13世紀頃と考えられる。

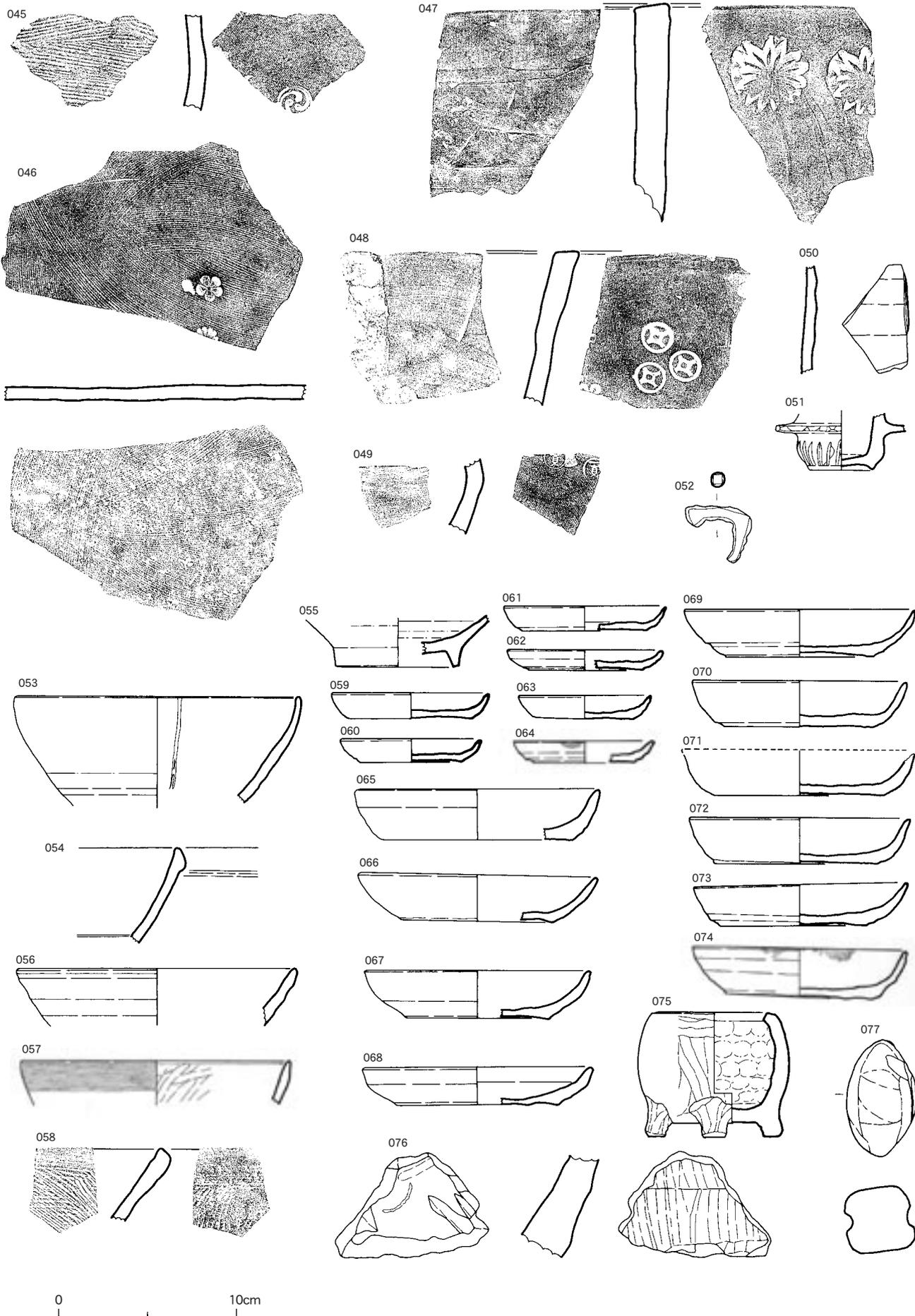
SD1021 (第4図) 第1面の中央に位置し、SE1053を切る。SD1024と同一の溝である可能性がある。調査区の南端でSK1054に切られる。Ⅰ区で検出したSK1004との切り合いは調査区の境界と重なったため、不明瞭である。検出面からの深さは27cmを測る。出土遺物(第8・9図001～



第7図 溝実測図(1/40)



第 8 図 SD1021 出土遺物実測図 1 (1/3)



第9図 SD1021 出土遺物実測図2・SD1024 出土遺物実測図(1/3)

052)。001～013は土師坏で、底部切り離しはすべて糸切りである。014～035は土師皿で、これも底部切り離しはすべて糸切りである。坏と皿はかなりの数が出土したものの、土圧で細片化していたため、図化できるまで復元できた点数は少ない。034と035は体部に煤が付着しており、灯明皿として使用している。036は白磁皿で高台部は露胎である。037は須恵器甕胴部である。038は瓦質の焼き物で鬼瓦片か。039は丸瓦の瓦当で巴文を施す。040は須恵質の丸瓦、041・042は平瓦である。043は瓦質製の獅子である。瓦もしくは博多人形的一种か。044は土師質の浅鉢で、045～049は火鉢片と思われる。046が土師質で、後は瓦質である。050は陶器壺で釉は緑色を呈す。051は青磁である。052は鉄釘である。SK1004と遺物が混ざってしまったため遺構の正確な時期は不明である。1024と同様に近世後半と思われる。遺物は中世貿易陶磁がまとまって出土している他に、近世の瓦質火鉢や近世の丸瓦等が出土した。また、博多171次調査の近世井戸で井戸枠に使用していた瓦質の大型鉢（『博多129』福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告第1041集P10 遺物番号024）に似た破片が出土している。この井戸枠に使用された大型鉢の報告例は少ないが、171次の他に187次調査の近世井戸からも破片がまとまって出土しており、今のところ近世後半の井戸に伴う可能性が高い。

**SD1024**（第4図） 第1面の東寄りに位置する。溝は南北方向で、緩やかに蛇行しながら北側に広がる。底面の標高は北側が若干低い。溝の幅は110～190cmで、検出面からの深さは15～28cm前後を測る。埋土は炭化物を多く含み、暗灰褐色を呈す。出土遺物（第9図053～077）。底面から20cm前後浮いた状態で、白磁碗や陶器類、瓦器碗、土師坏・皿が出土した。遺物の中では土師坏と皿の量が多いが、実測できるまで復元できた点数は少ない。053～055は白磁碗、056・057は瓦質碗、058は瓦質鉢である。059～064は土師皿、065～074は土師坏で、底部切り離しは全て糸切りである。075は瓦質の香炉で復元口径は7cmを測る。黒褐～暗灰色を呈し、内面全体に指オサエ、外面には丁寧な研磨を施す。076は石鍋片、077は土錘で長さ6.6cm、幅3.9cmを測る。

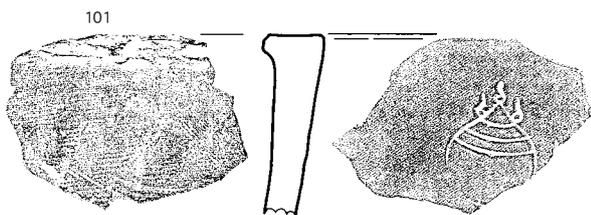
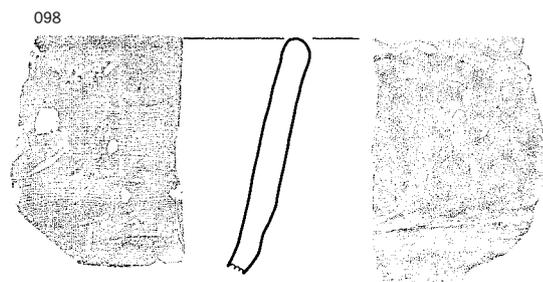
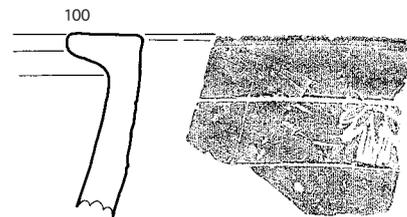
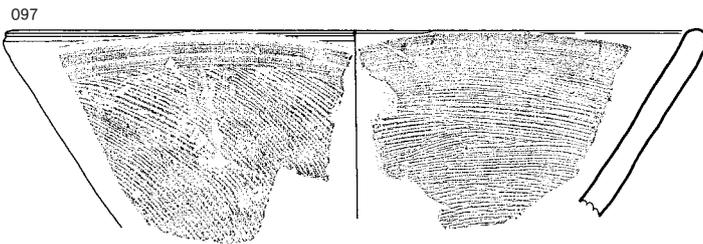
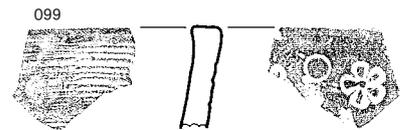
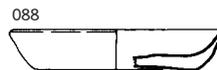
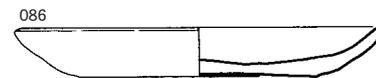
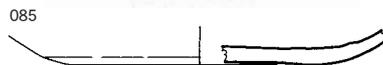
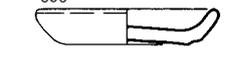
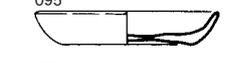
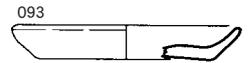
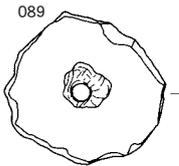
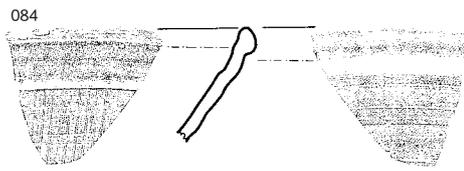
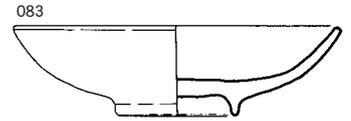
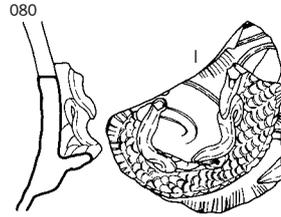
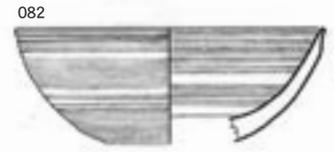
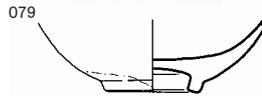
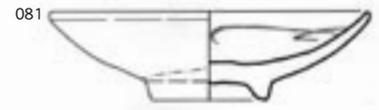
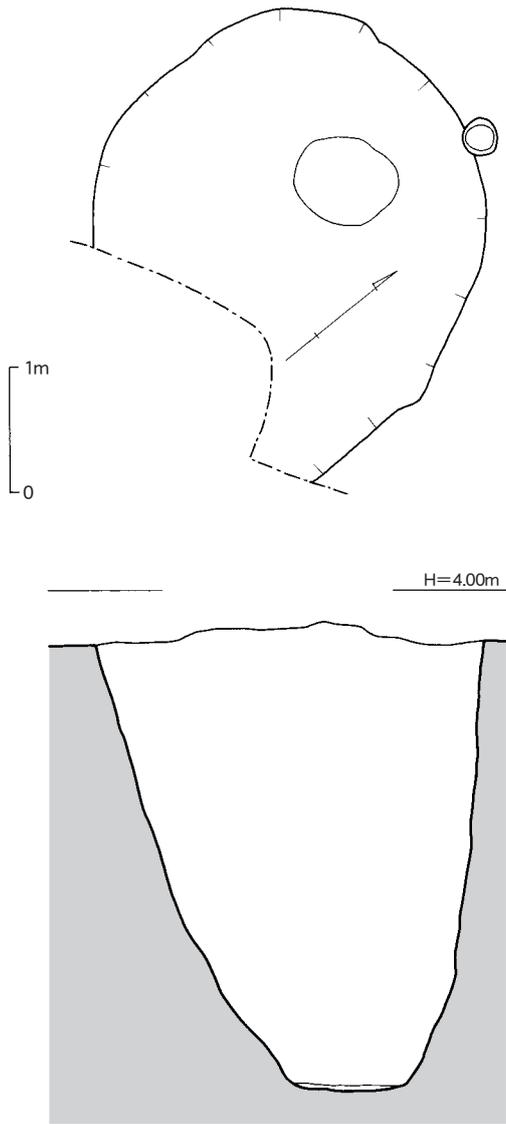
**SD2003**（第18図） 2面の西北側に位置する。主軸をN-48°-Eにとる。東側がSK2001に切られ、西側は調査区外に延びる。溝の幅80cm、検出面からの深さ34cmを測る。埋土は暗灰色を呈し、埋土中から白磁碗Ⅱ類や土師皿（ヘラ切り）が出土した。12世紀前半頃と考えられる。

**SD2006**（第7図） 2面の中央に位置する東西方向の溝で、東側をSE1053とSP2005に、西側をSK2001に切られる。現状で長さ1.4m、幅70cm、検出面からの深さ6～9cmを測る。埋土から出土したのは土器小片8点のみである。時期不明。

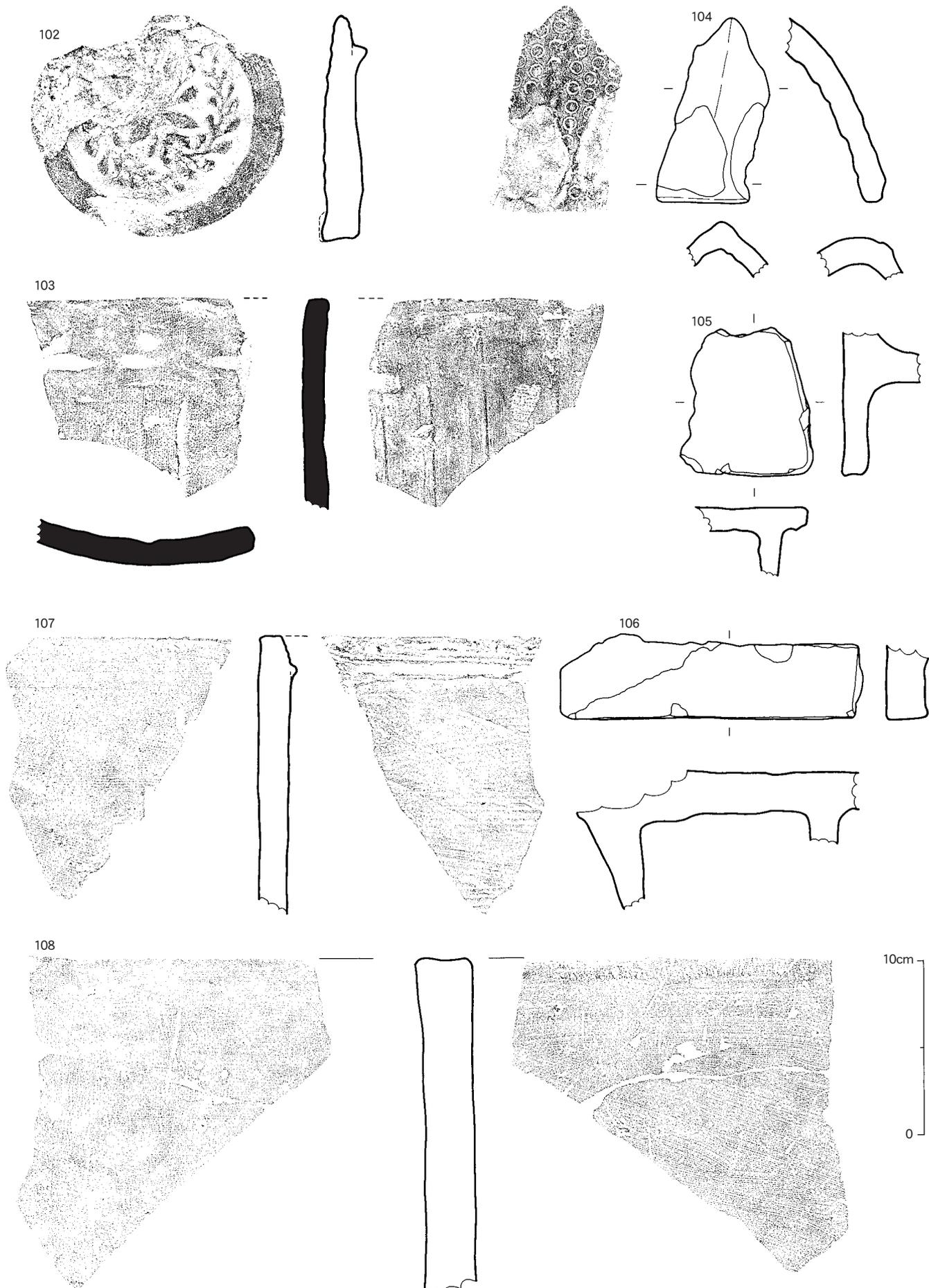
**2) 井戸** 3基の井戸が出土した。時期はSE1019が近世後半で、他は12～13世紀頃である。

**SE1019**（第10図） 第1面の南端に位置する井戸である。平面形は南北に長い楕円形を呈し、遺構の南端は調査区外に延びる。現状で南北3.5m、東西3m、検出面からの深さ3.7mを測る。埋土は灰色を呈し、近世陶磁や瓦片などを多く含む。井筒は残っていなかったが、瓦片が多く出土しており、瓦組みの井筒であったと思われる。底面直上で瓦質（第11・12図107～109、111）と土師質（110）の大型鉢片がまとまって出土した。大型鉢は口径の推定が65cm前後になる。171次で出土した近世後半の井筒と大きさや調整が似ているため、SE1019でも井筒として使用していた可能性はあるが、破片は調整などから少なくとも3個体分が含まれており、複数個体を積み重ねて井筒として使用したか、もしくは近辺の窯で焼いた破損品を廃棄した可能性などが考えられる。井筒を抜く際に祭祀を行っており、1本の竹を垂直に立てて埋めた痕跡が残っていた。遺物は078～114（第10・11・12図）が出土した。112は土製の仏像である。113は大型の砥石で、窯業生産に関連する道具の可能性はある。114は弥生時代後期の甕棺の突帯部分である。

SE1019

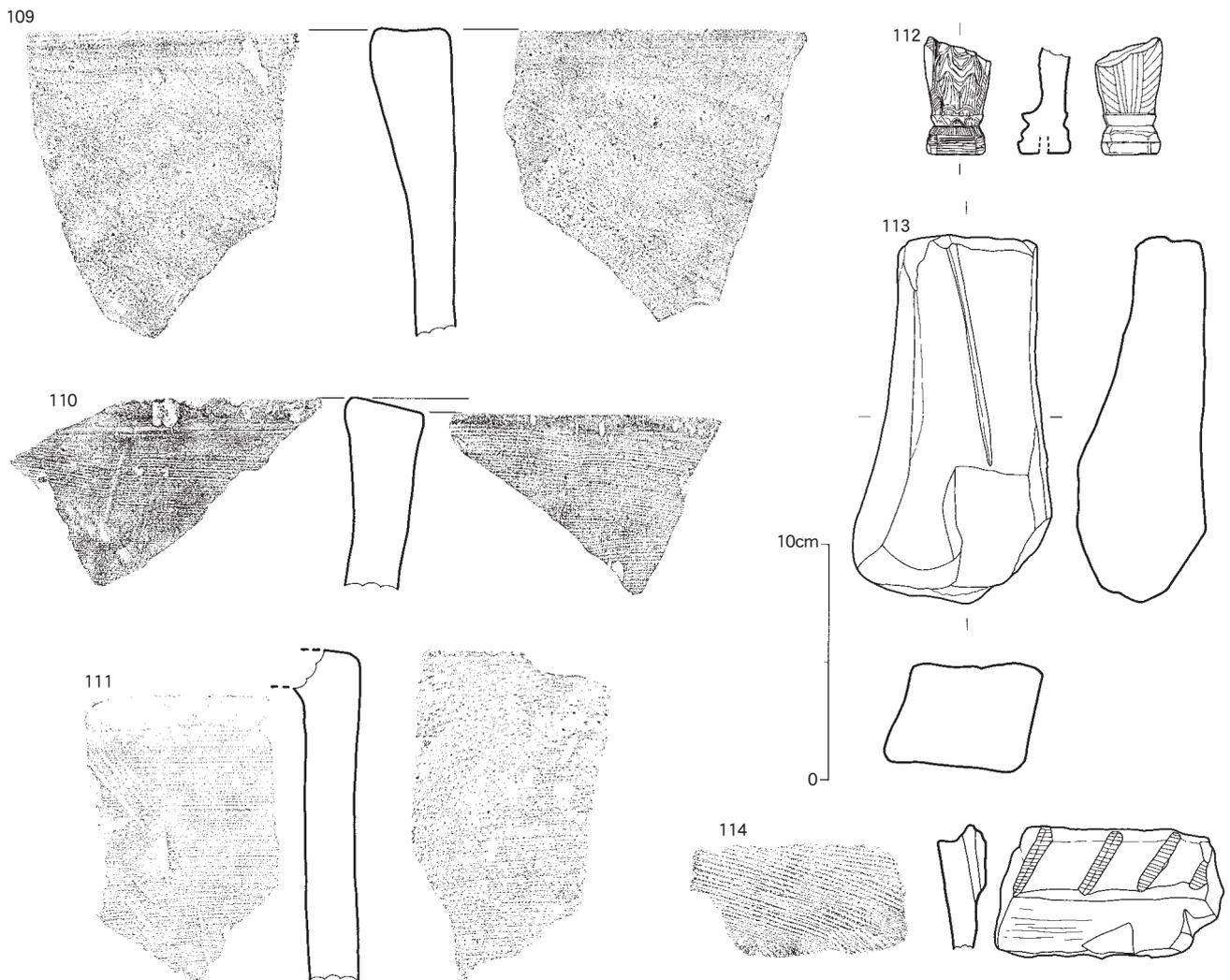


第 10 图 SE1019 实测图 1 (1/60 · 1/3)



第 11 图 SE1019 実測图 2 (1/3)

SE1053 (第13図) 第1面の南側に位置しており、SE1019やSK1054に切られる。平面形はほぼ円形を呈す。現状で径3.7m、検出面からの深さ2.7mを測る。底面は円形で径1.7mを測る。井筒は底面の中央やや北側に位置し、底面からの深さ75cmを測る。井筒は木桶を使用しているが、遺存状態は悪く、木質は薄い膜状に残るのみである。出土遺物(第13～15図 115～184)。115～119は同安窯系青磁で115～118が碗、119は小碗、120～122は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、123は青磁皿である。124～126は白磁合子、127～131は白磁碗である。132～134は白磁片で、外底部に墨書がみられる。135は白磁小碗、136～141は白磁皿、142は青白磁の香炉である。143・144は天目碗で井筒から出土した。145～150は陶器で151は碗小片である。151は黒色土器A類碗、152・153は土師碗、154～156は土師坏、157～160は土師皿で底部切り離しは糸切りで、その多くに板状圧痕がみられる。156の底部両面には、焼成後に穿孔しかけた痕跡がみられる。161～163は須恵器甕、164～166は須恵質の平瓦で164は両面にナデを施す。167は土製の玉で径2.4cmを測る。168～173は井筒内からの出土で168・169は平瓦、170～173は石製品である。170は砥石、171・172は滑石製石鍋からの転用で171は錘、172は未製品と思われる。173は積み重ねて炉壁を築くための煉瓦状の土製品である。174～184は掘方下層から出土した遺物で、174は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、175・176は白磁碗である。177・178は陶器壺、179は陶器鉢Ⅵ類、



第12図 SE1019実測図3(1/3)

180は陶器盤で、181は須恵器甕の胴部である。182は瓦器椀で内面に細かな螺旋状のミガキを施す。183は土師坏で底部切り離しは糸切り、こまかな板状圧痕が見られる。184は古墳時代前期の土師器甕である。出土遺物からこの井戸の時期は12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

SE2017（第16図）2面の西端に位置し、掘方の東南側をSE1053に切られる。調査区のI区で検出した2008とは掘方の輪郭がうまく合わない。平面はやや楕円形を呈し、長径3.1m、検出面からの深さ2.5mを測る。掘方の断面は逆円錐形を呈し、弧を描きながら検出面から底面に向かって急激にすぼまる。井筒は底面西側を径63cm、深さ25cmに掘込んで木桶をすえている。木質の残存状態は悪く、痕跡のみ確認した。出土遺物（第16・17図185～210）。185～190は白磁碗、191～194は白磁皿、195は陶器水注、196は陶器大甕、197は須恵器壺、198～200は須恵器皿である。192の白磁皿の外底部には墨書が見られる。201は土師質甕、202・203は土師椀、204は土師皿、205は黒色土器A類である。206・207は滑石製石鍋片、208・209は須恵質丸瓦である。209の凸面は格子タタキで、格子内に十字模様がみられる。210は古墳時代の小型丸底壺である。出土遺物から井戸の時期は11世紀後半～12世紀前半と考えられる。

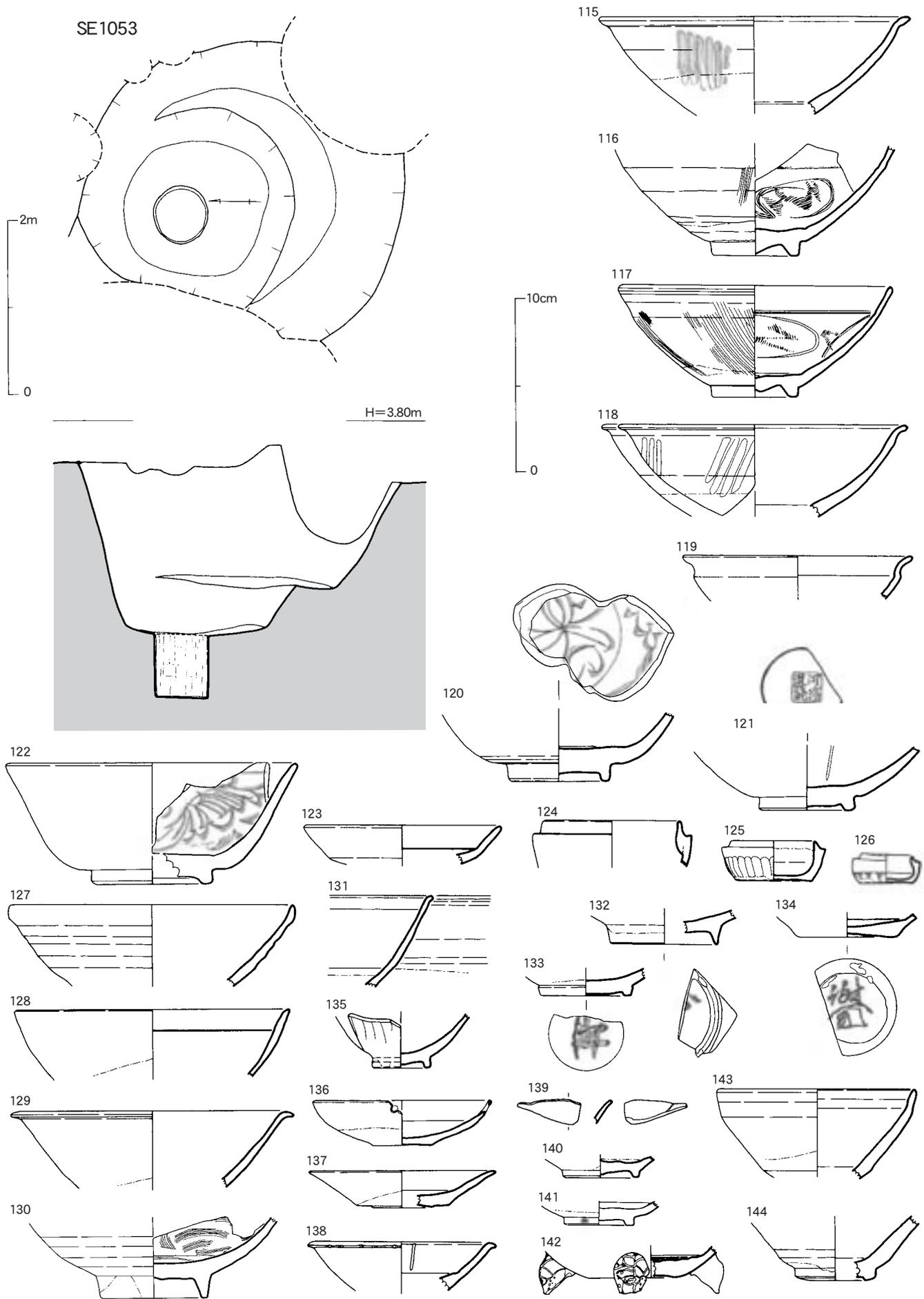
### 3) 土坑

SK1001（2009）（第18図）1面北西隅に位置し、遺構の北側と西側が調査区外に延びる。平面形は長方形を呈し、南北2m、東西1.7m、検出面からの深さは約1.4mを測る。他の土坑に比べると掘方がかなり大きく、井戸の掘方の可能性がある。埋土は暗灰褐色砂質土で白色粘土のブロックを多量に含む。出土遺物（第20図213～215）。213は耳壺IV類、214は常滑の大壺片、215は陶器鉢である。この他に白磁碗IV類や白磁皿、須恵器坏蓋、須恵器坏（底部ヘラ切り）、土師椀、土師坏・皿（糸切り）が出土している。出土遺物等から13世紀中頃と思われる。

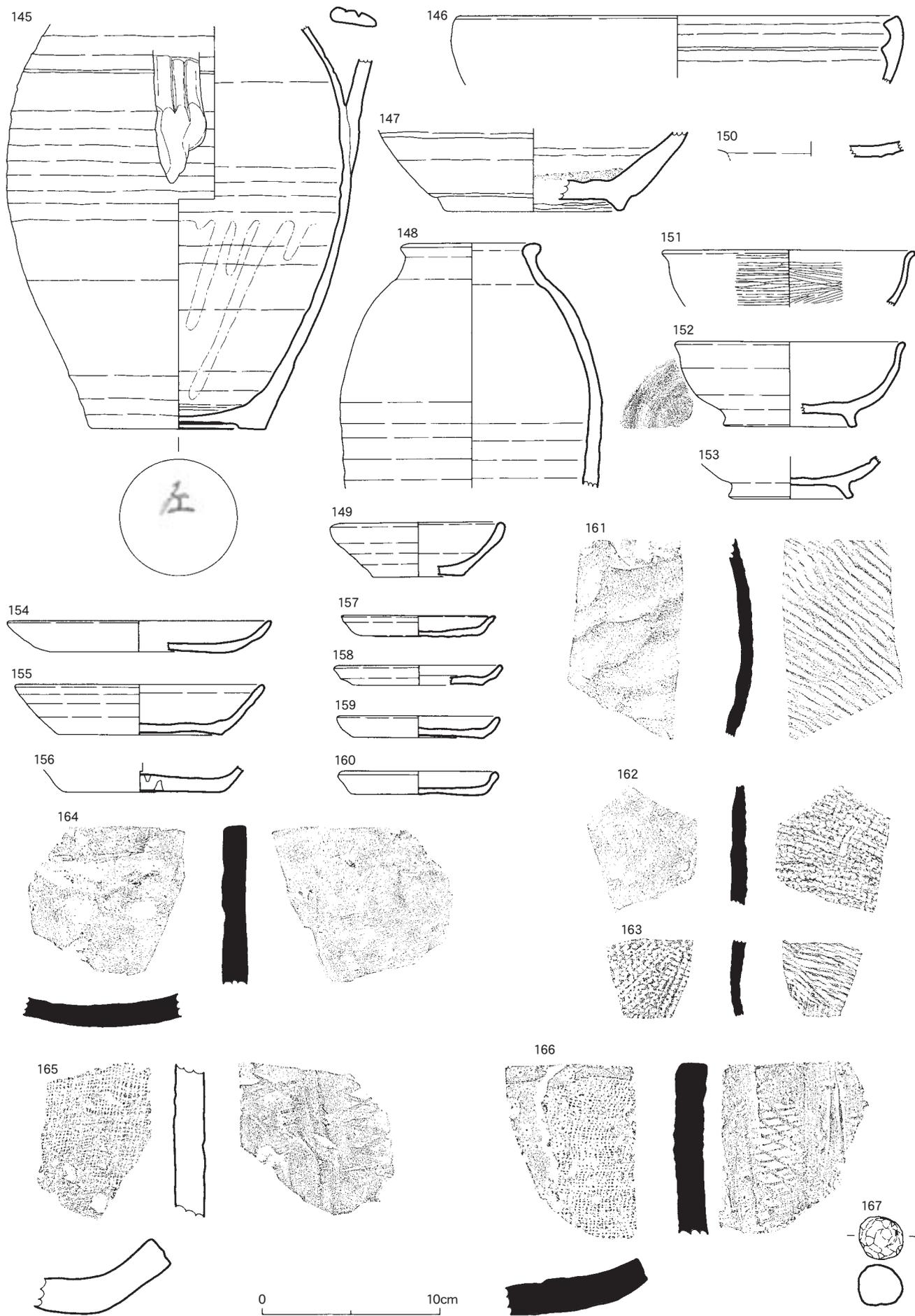
SK1002（第18図）1面北側に位置し、東端を試掘トレンチに切られる。遺構の平面形は東西に長い楕円形で、主軸はN-45°-Eである。現状で長径2.2m、短径1.7m、検出面からの深さ30cmを測り、掘方断面は浅皿状を呈す。底面西端に径60cm、深さ40cmの注穴状の掘り込みがあり、東端に三日月状のテラスがつく。埋土は灰褐色砂質土で、径が2～3mm程の粗砂を多く含む。出土遺物（第20図216～224）216は陶器碗、217は白磁皿である。218・219は瓦質鉢、220は土師質鉢、221～223は土鈴である。224は寛永通宝である。遺構の時期は近世後半である。

SK1020（第18図）1面南端に位置し、SE1019に切られる。遺構の南側半分が調査区外に延びる。平面形は円形もしくは楕円形と思われ、現状で東西1.8mを測る。検出面からの深さは1.1m程で掘方断面は播鉢状である。埋土は中央部に向かって傾斜するレンズ状の堆積で、1層の厚さは15～40cm程を測る。下半は瓦片と炭化物を多く含み、上半は瓦片はあまり含まずに焼土ブロックや褐色粗砂を多く含む。出土遺物（第20図225）。225は瓦質小型鉢で3本の脚が付く。口縁は輪花である。香炉もしくは小型火鉢か。近世の遺物はその他に少量の陶器碗と多量の瓦片が出土している。遺物の多くは中世に属するもので、白磁碗V類や龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2類などの貿易陶磁の他、須恵器播鉢、瓦質鉢、土師質火鉢、土師坏・皿などが出土した。

SK1054（第18図）1面の中央に位置し、主軸をN-27°-Wにとる。平面は南北に長い楕円形を呈し、長径1.8m、短径1.45m、検出面からの深さ80cmを測る。検出面から50cm程の深さに環状のテラスがつく。埋土は暗褐色でやや茶色を帯びる。埋土中に礫と土器片を多く含む。出土遺物（第20図226）。226は埴塙である。その他の出土遺物は白磁碗Ⅱ・V類、白磁皿、陶器大甕、黒色土器A類椀、瓦質片口鉢、須恵器鉢、須恵器甕、土師質鉢、土師椀、土師坏（糸切り・ヘラ切り）、土師皿（糸切り）、手づくね土器など11世紀後半から12世紀頃の遺物が多く出土する他、古墳時代前



第 13 图 SE1053 実測图 1 (1/60 · 1/3)

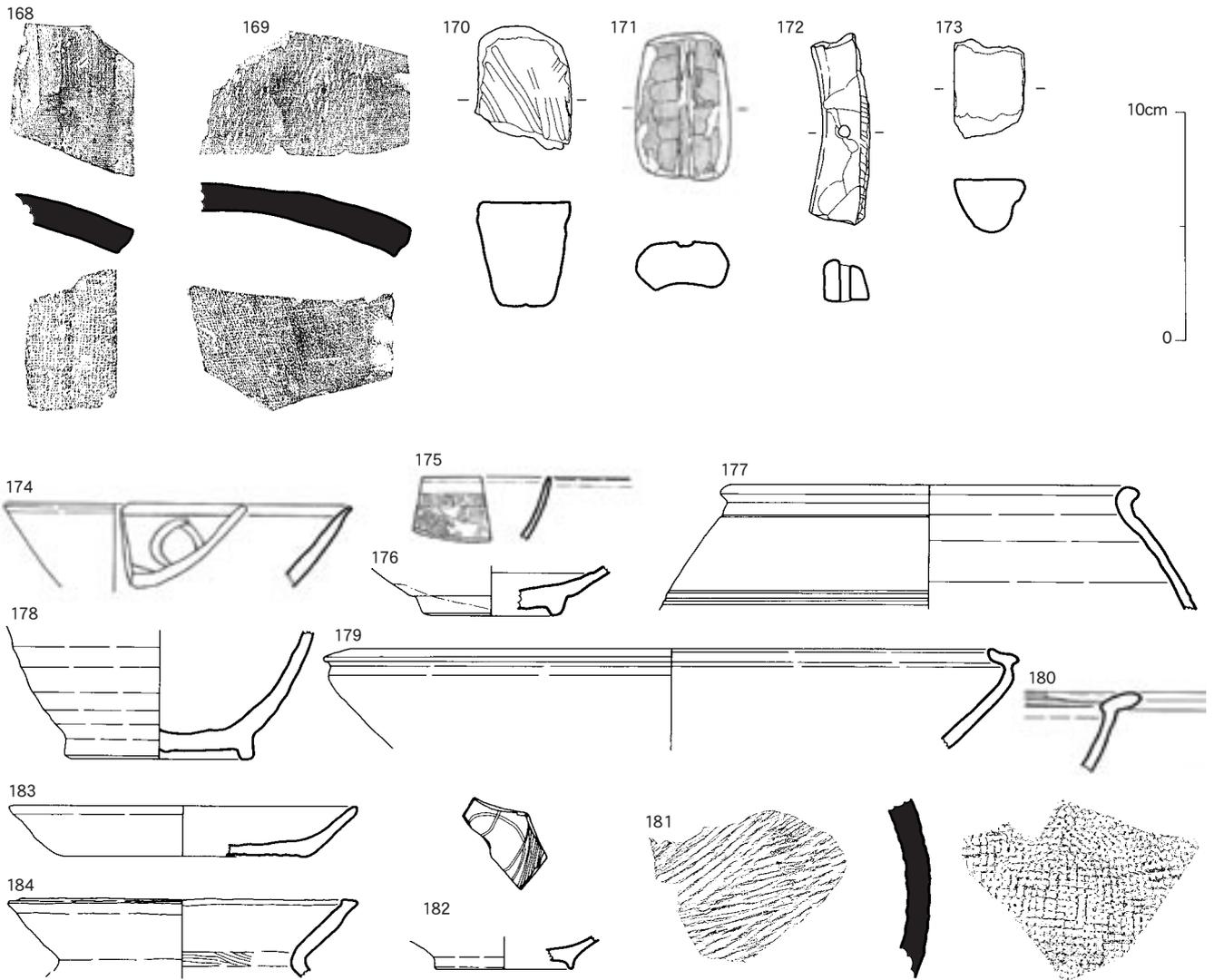


第 14 図 SE1053 実測図 2 (1/3)

期の甕も出土している。近世と思われる遺物は染付鉢と白磁の瓶の2点が出土しているが、小片であるため近世であるかどうかも含めて、明確な時期は不明である。

SK2001 (第18図) 2面の北西側に位置し主軸をN-55°-Eにとり、平面形は長方形を呈す。長径2.3m、短径1.2m、検出面からの深さ80cmを測り、掘方断面は逆台形である。埋土は灰褐色でレンズ状の堆積である。北側底面の直上で礫や土器片がまとまって出土した。2001から西側に溝状の掘込みが延びる(SD2003)。主軸が揃うことなどから関連する遺構と思われるが、詳細は不明である。出土遺物(第21・22図234~268)。234・235は陶器皿、236・237は白磁碗である。234・236・237の外底部には墨書がある。238~241は土師坏で、239は底部中央に、240は体部に穿孔がある。241は両底面に墨書がみられる。242~253は土師皿、254は土師坏蓋、255は土師質火鉢、256は土錘である。257~260は瓦質で、257は容器と思われる。その他に258は取手、259は羽釜、260は坏蓋である。261は棒状の土製品で両端が折れている。262は青磁製の犬である。263・264は土鈴、265は砂岩製玉、266~268は瓦質瓦である。遺構の時期は近世である。

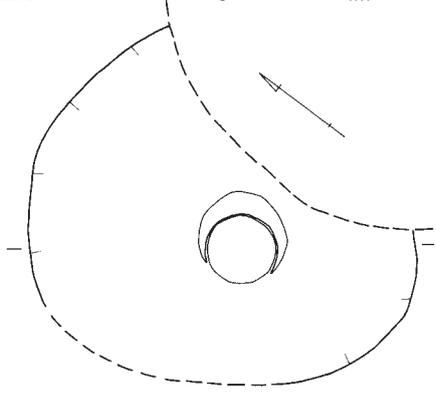
SK2013 (第18図) 2面の北西隅に位置し、SK2001に切られる。平面は南北に長い長方形で、現状で80cm、幅75cm、検出面からの深さ29cmを測る。出土遺物(第20図227・228)。227は白



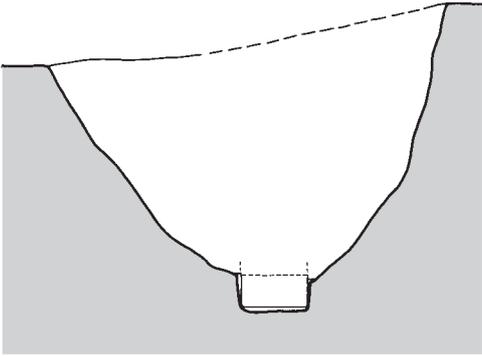
第15図 SE1053 実測図3 (1/3)

SE2017

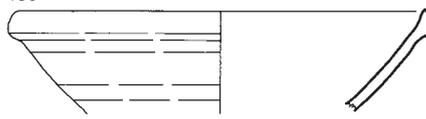
0 1m



H=3.60m



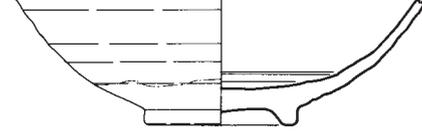
185



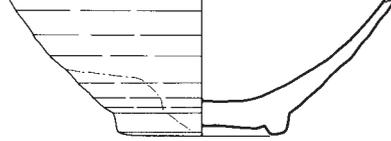
186



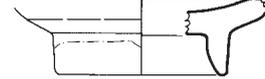
187



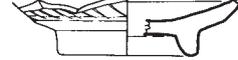
188



189



190



191



192



193



194



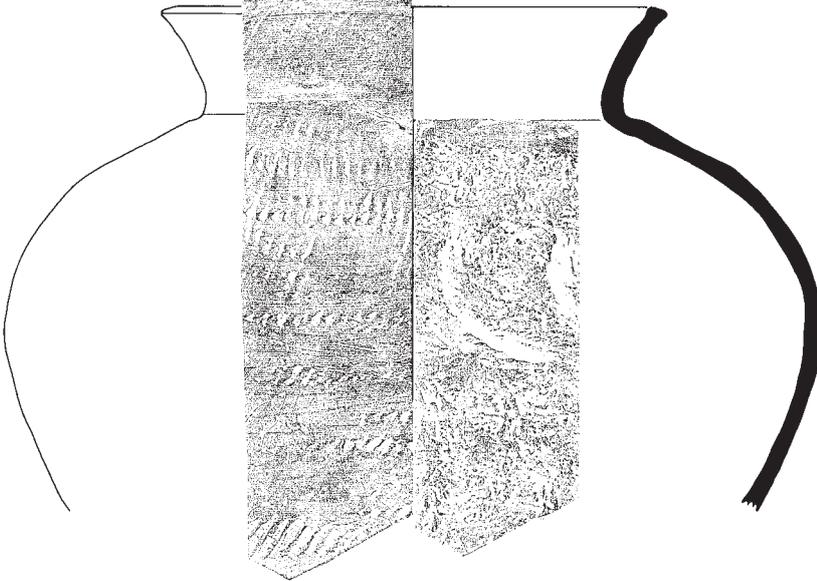
195



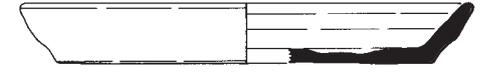
196



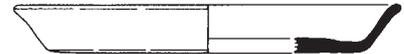
197



198



199

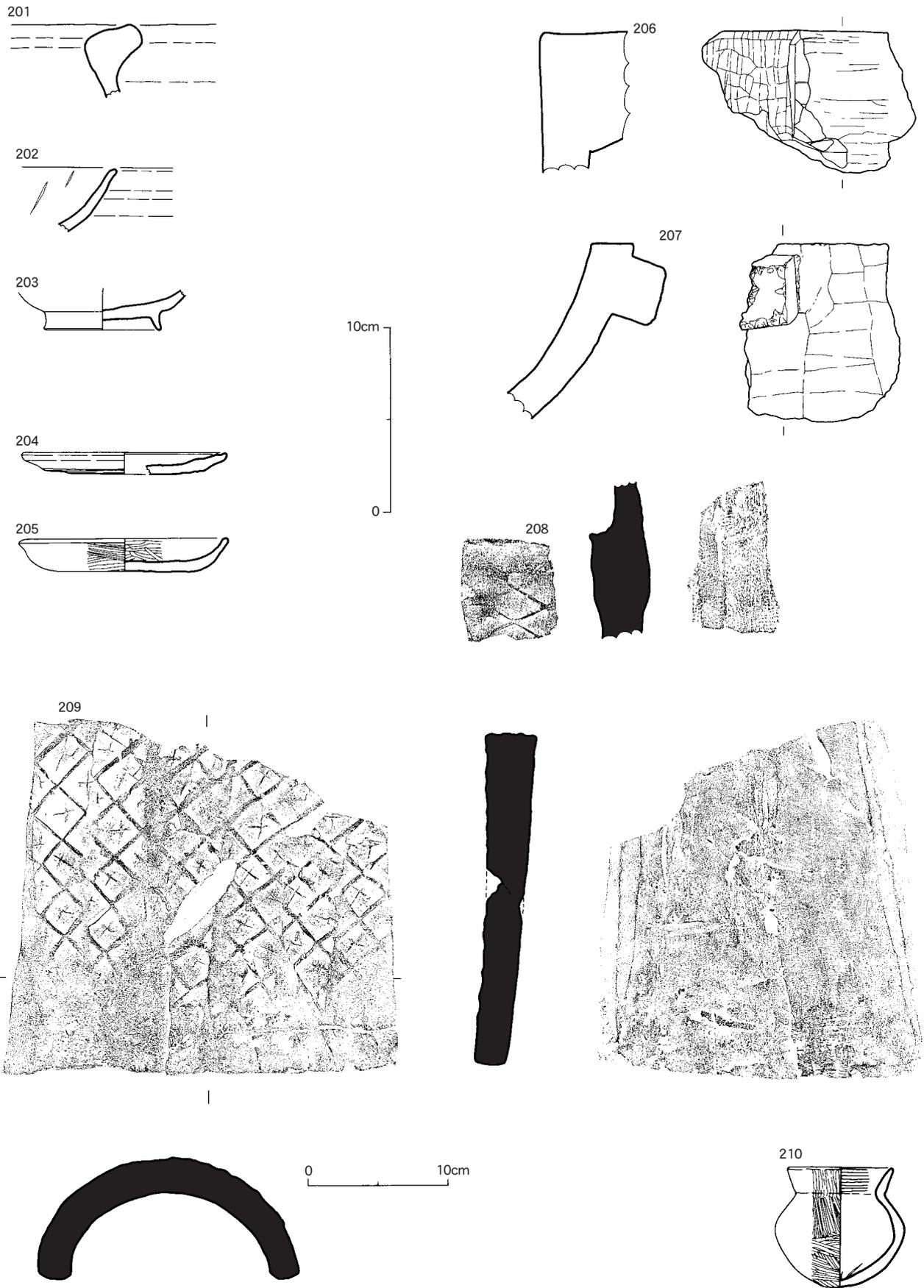


200



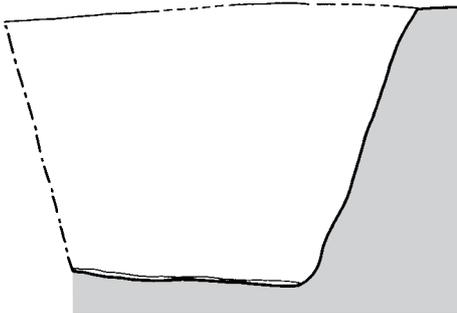
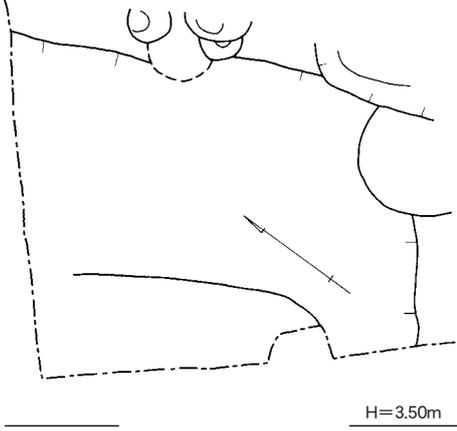
0 10cm

第 16 図 SE2017 実測図 1 (1/60 · 1/3)

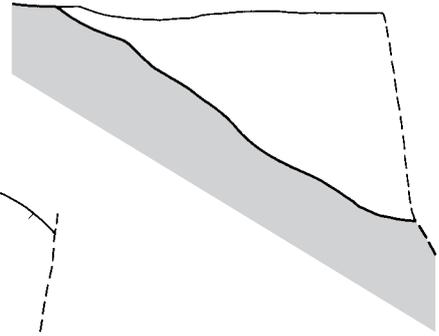
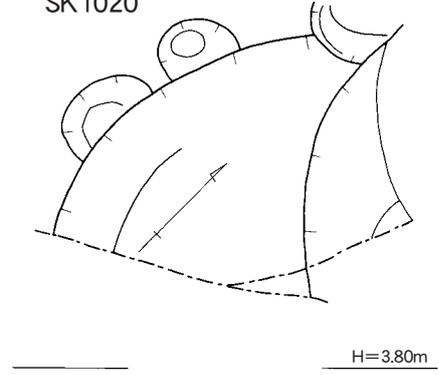


第 17 図 SE2017 実測図 2 (1/3・209 は 1/4)

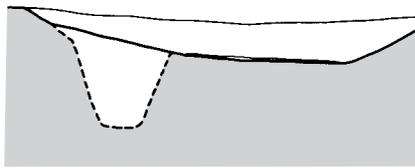
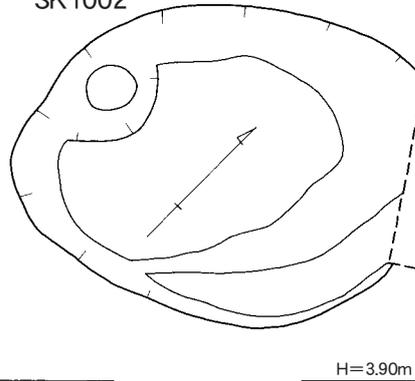
SK1001 (2009)



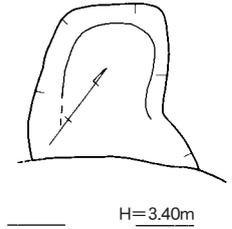
SK1020



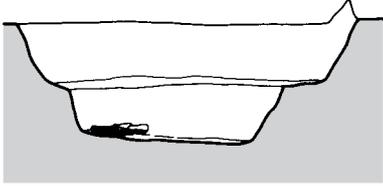
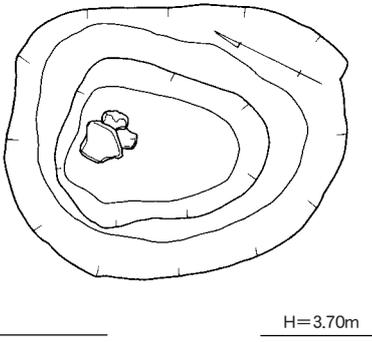
SK1002



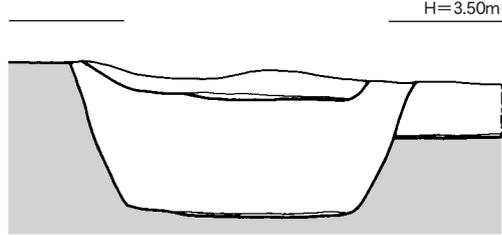
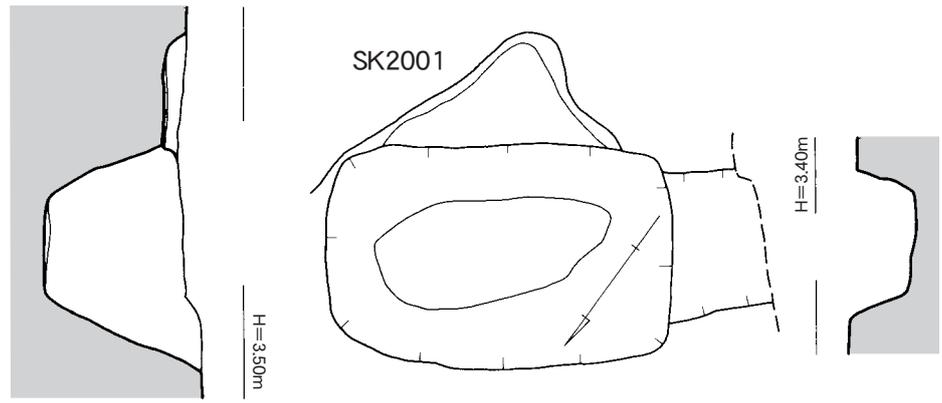
SK2013



SK1054



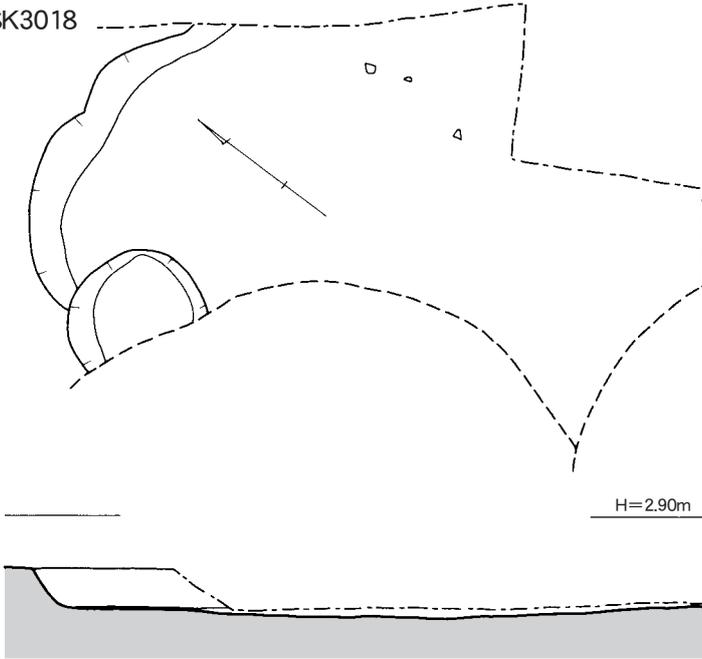
SK2001



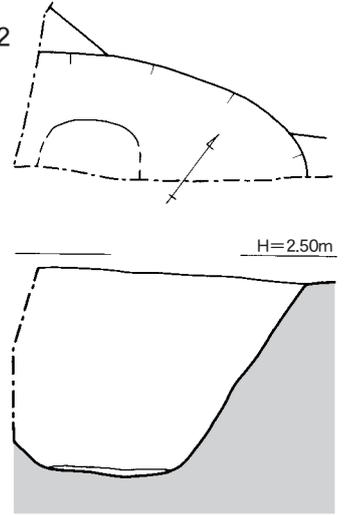
0 1m

第 18 图 土坑实测图 1 (1/40)

SK3018

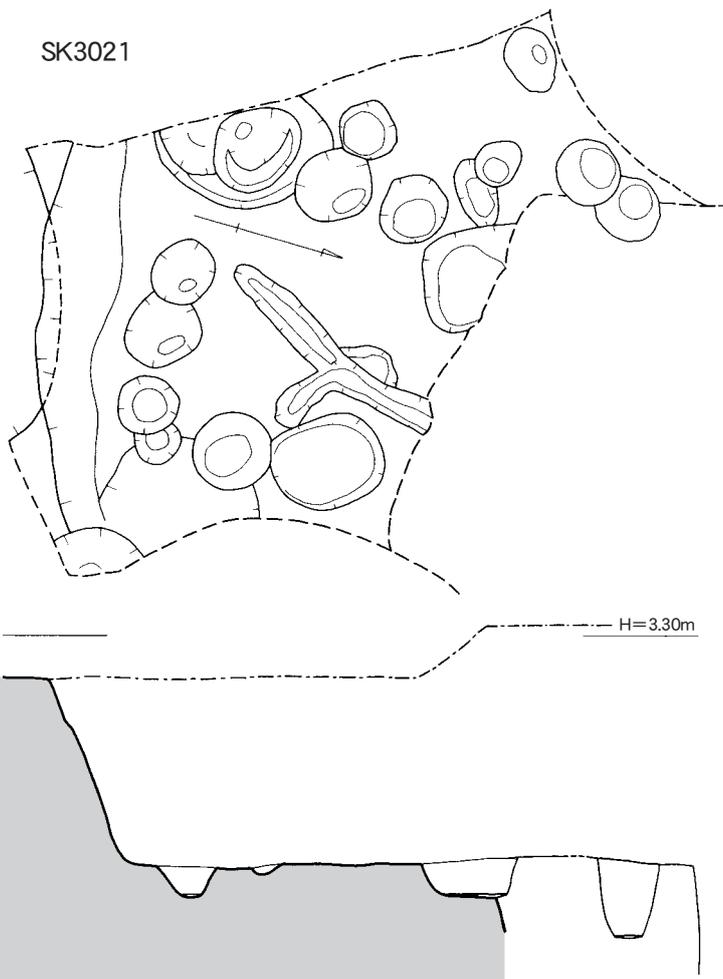


SK3022

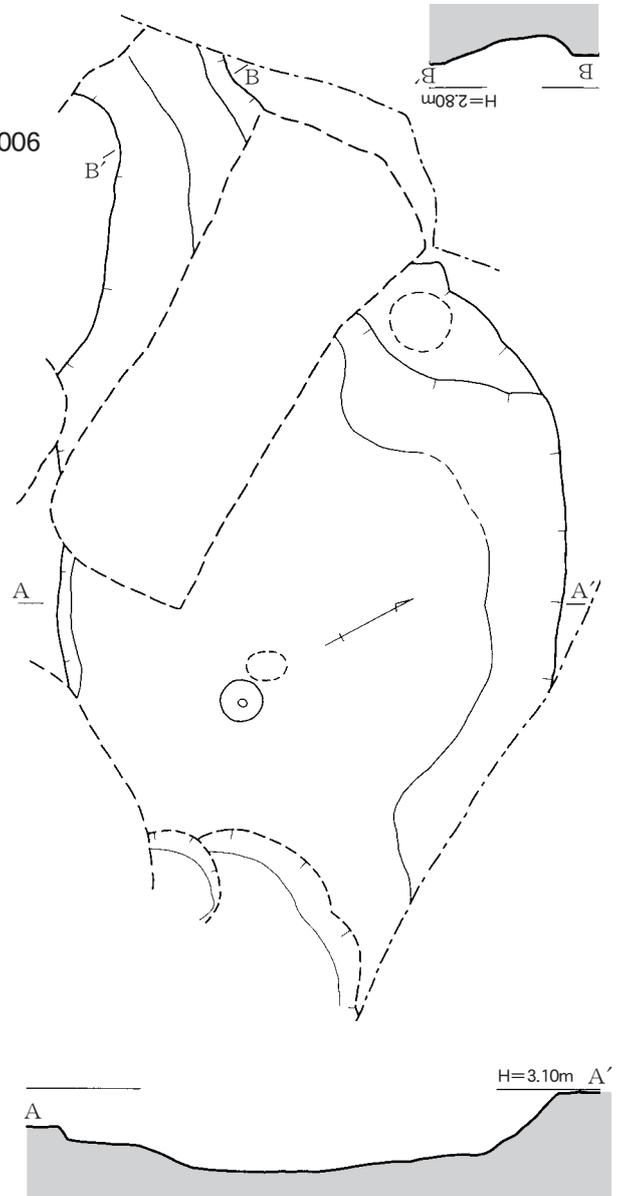


0 1m

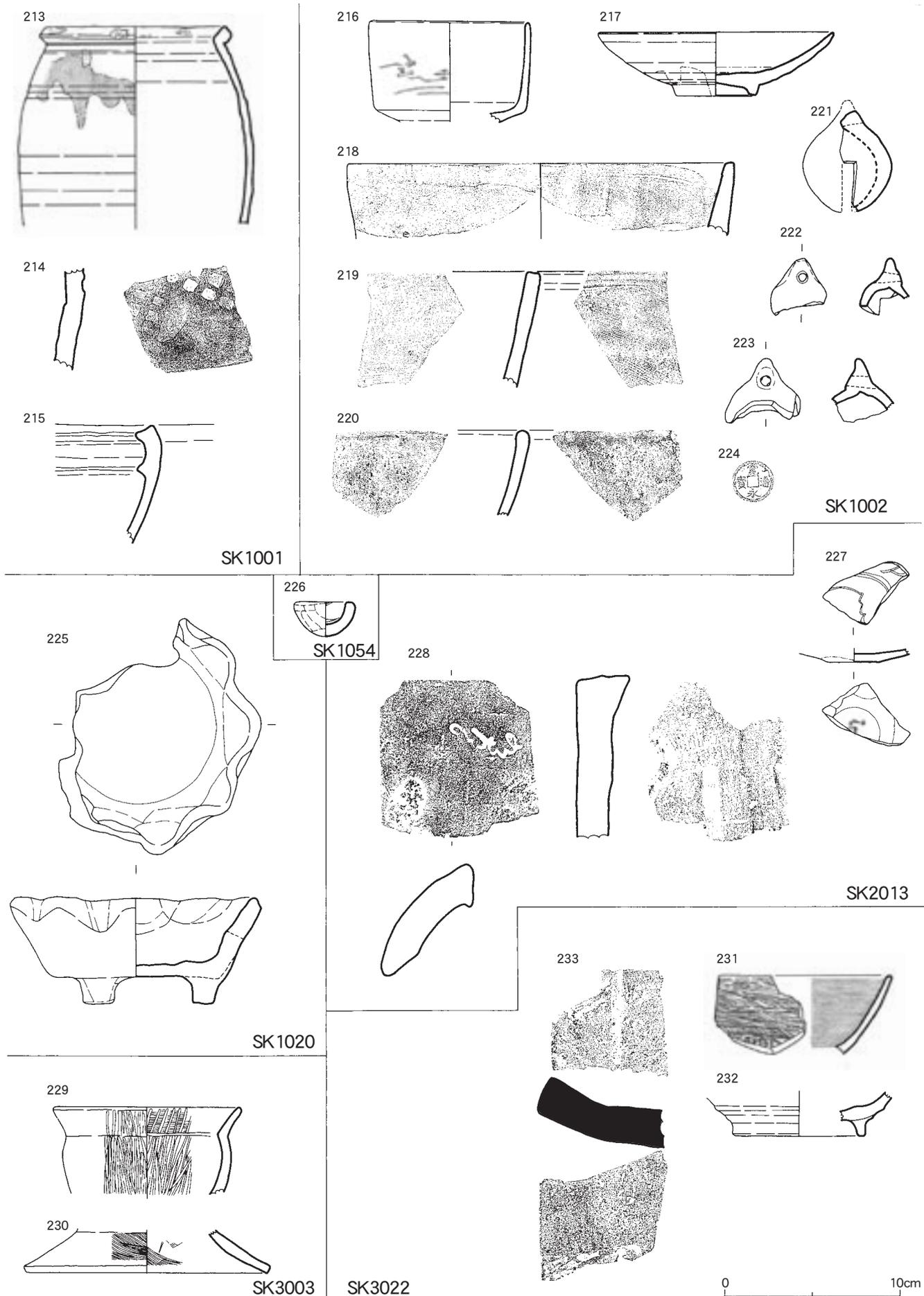
SK3021



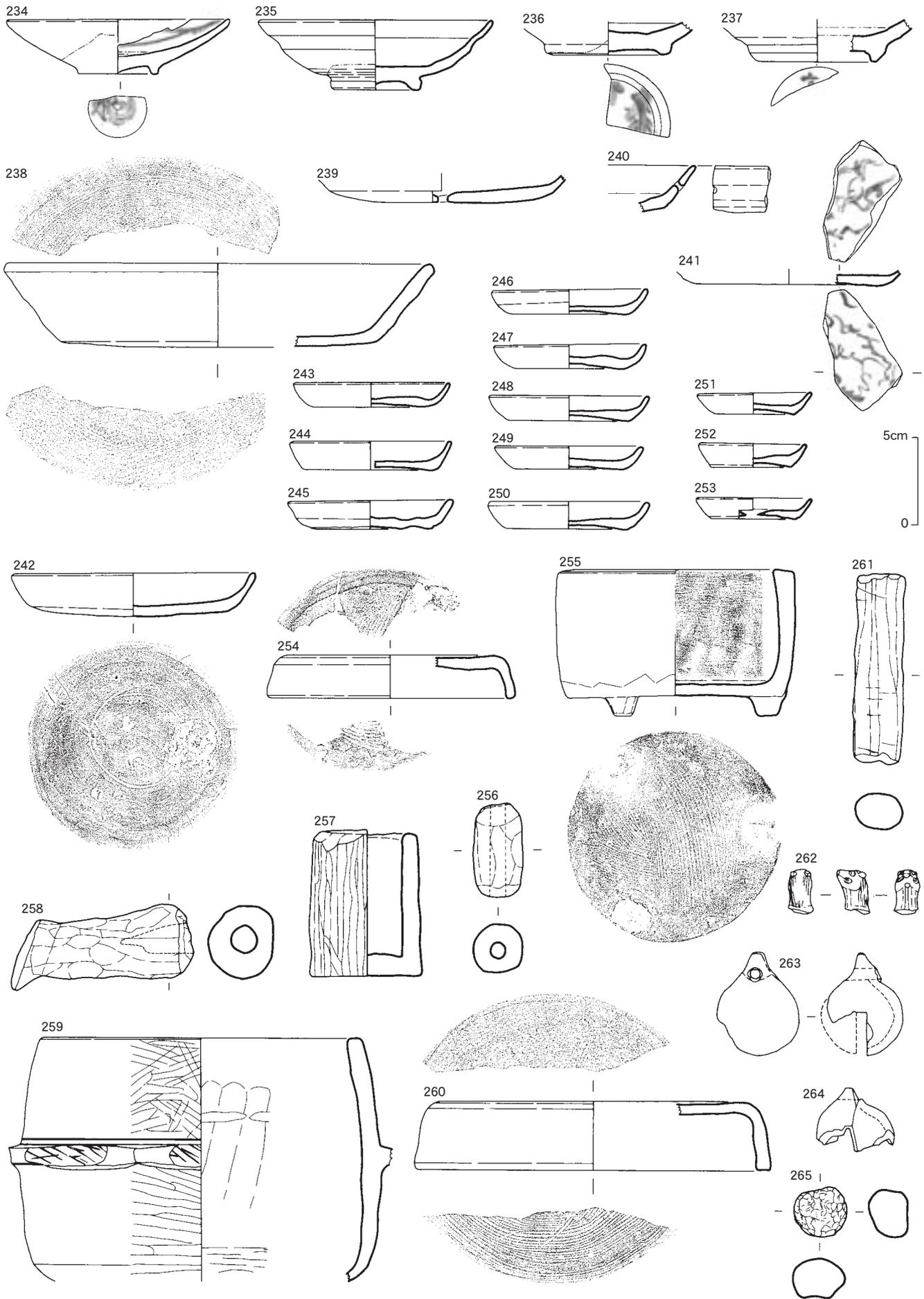
SK3006



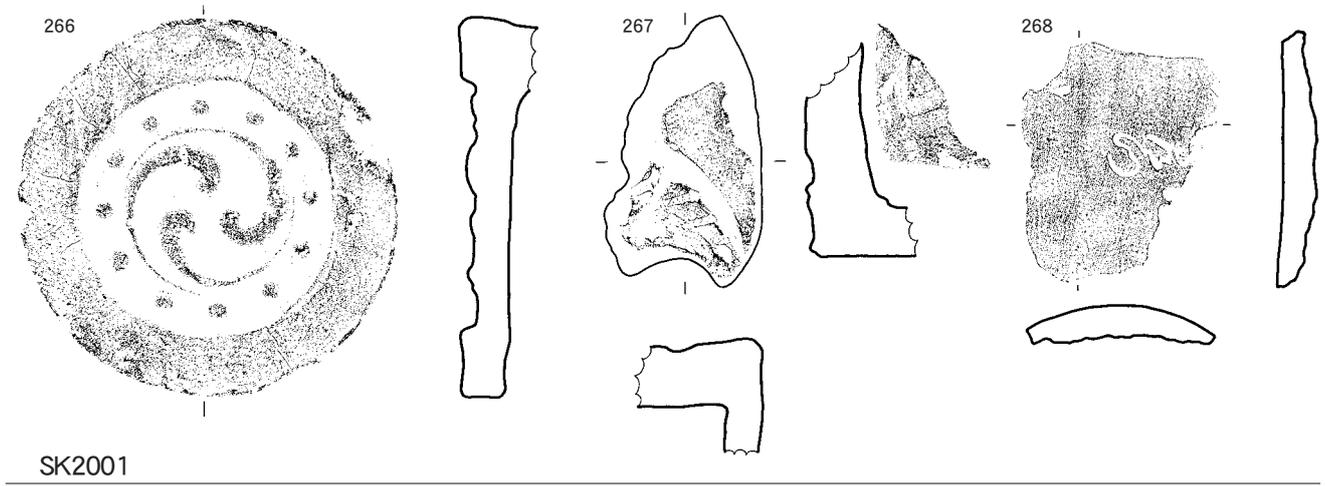
第 19 图 土坑実測図 2 (1/40)



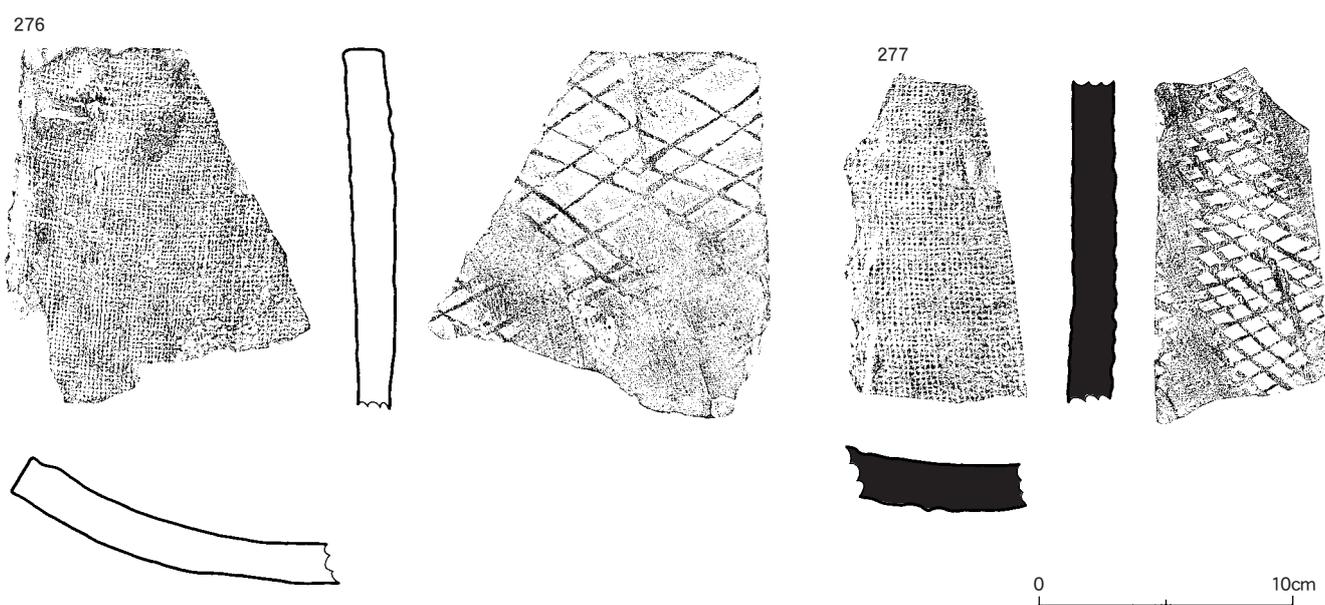
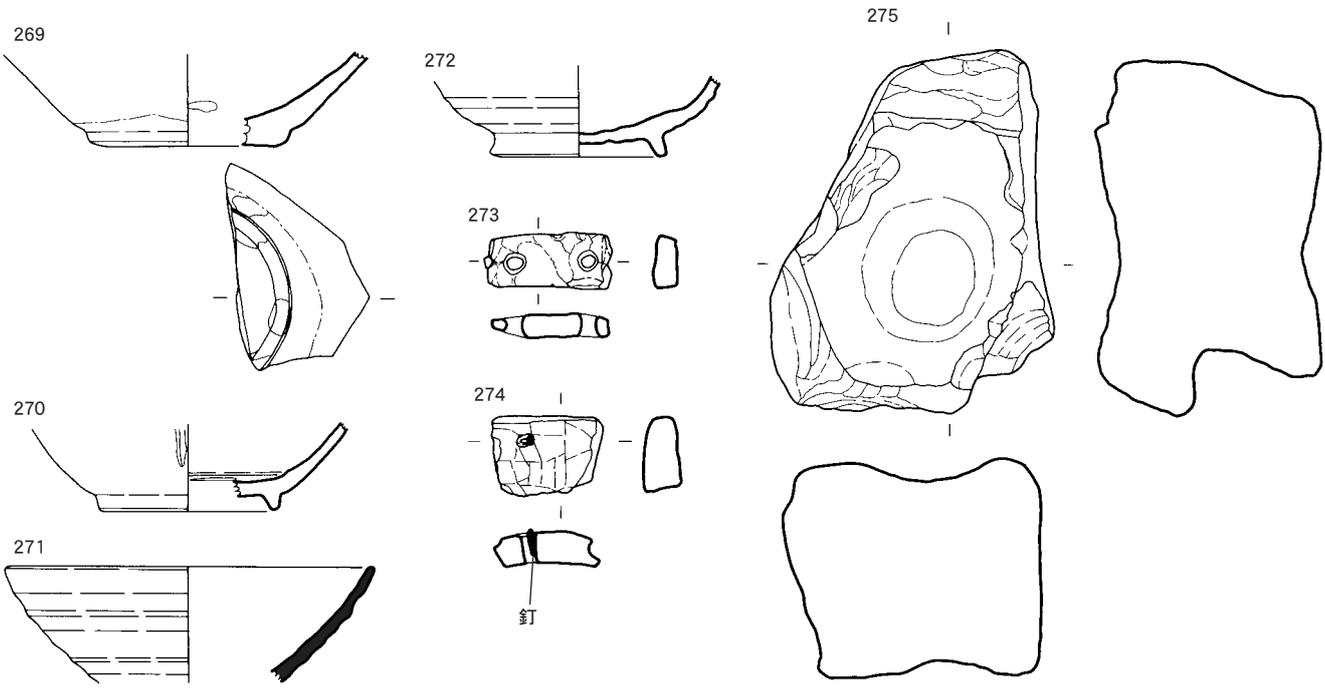
第 20 图 土坑出土遺物実測図 (1/3)



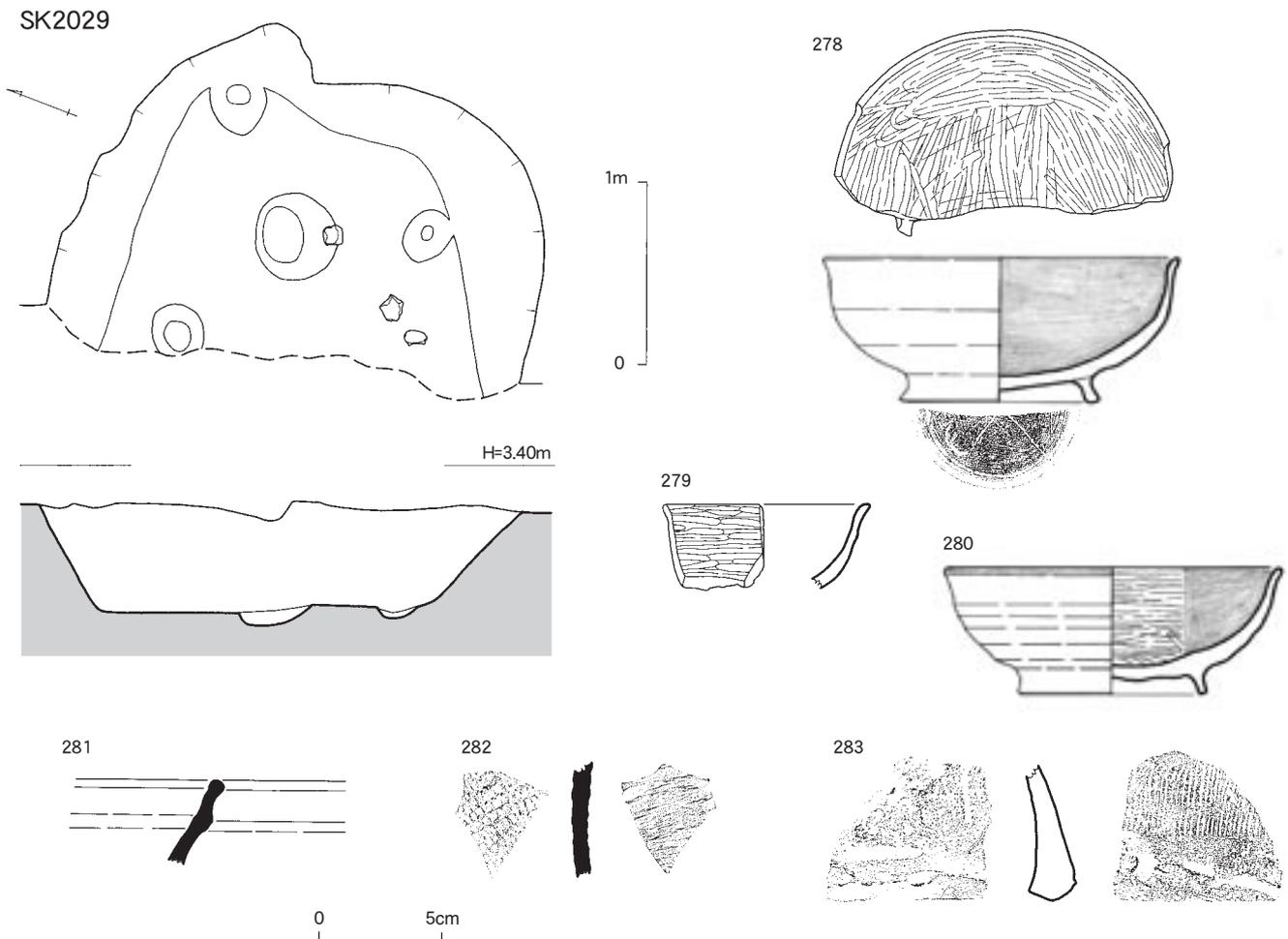
第 21 図 SK2001 出土遺物実測図 (1/3)



SK3021



第 22 図 SK2001・3021 出土遺物実測図 (1/3)



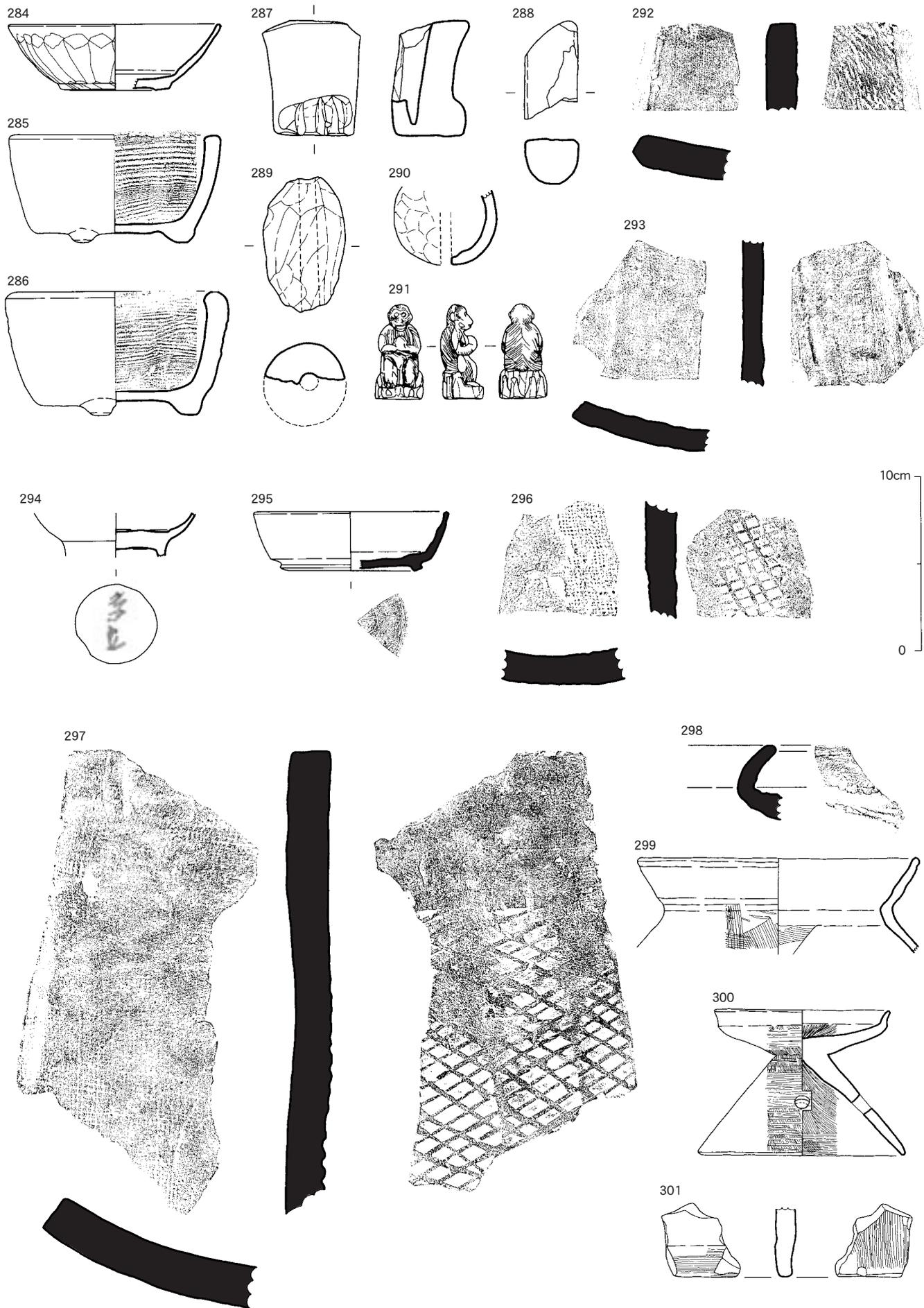
第23図 SK2029 実測図 (1/40・1/3)

磁皿で外底部に墨書がある。228は瓦質の丸瓦である。近世後半である。

SK2029 (第23図) 2面のI区とII区に跨る。I区では2010としたがII区とまとめて2029で報告する。遺構は西側を試掘トレンチに切られる。平面形は隅丸方形を呈し、径2.8m、検出面からの深さ20cmを測る。掘方断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色を呈す。南東隅から浅い舌状の掘り込みが南東に伸びるが、SP2019に切られる。出土遺物(第23図278～283)。278～280は黒色土器A類椀である。281・282は須恵質で281は壺口縁、282は甕胴部である。283は土師質で竈の裾と思われる。その他に青磁碗片や褐釉陶器片など12世紀代の遺物もあるが、出土状況から混入の可能性があるので、遺構の時期は11世紀頃と考えられる。

SK3003 (3006) (第19図) 3面北側に位置する。前述したSK2029とかなり重なるが、埋土の違いや出土遺物の時期が異なることから別遺構とした。遺構は東西方向に延びる溝状を呈し、埋土は茶褐色砂である。東西両端とも調査区外に延びる。現状で東西長約7m、幅3.5m、検出面からの深さ55cmを測る。掘方断面は浅皿状を呈すが、立ち上がりが緩やかで自然の窪みである可能性がある。出土遺物(第20図229・230)から古墳時代前期と考えられる。

SK3018 (第19図) 3面の南東隅に位置し、SE1019、SE1053、SP3007に切られ、SK3003を切る。遺構の残りが悪いのと東側が調査区外に延びるため、平面形などは不明である。現状で南北3.5m、東西2.4mを測る。検出面からの深さは26cmと浅く、掘方断面は浅皿状を呈す。埋土は暗茶褐色で黒色土器B類椀や須恵器甕、土師器甕などが出土した。遺構の時期は10～11世紀頃と思われる。



第 24 图 包含層出土遺物 (1/3)

SK3021(第19図) 3面の南西隅に位置する。SE1019、SE1053、SE2017に切られSK3022を切る。3辺を後世の遺構に切られるが、残存する西側の掘方は緩やかな弧を描いており、平面形は円形もしくは楕円形であったと思われる。現状で南北2.4m、東西2.5mを測る。掘方断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは1.2mを測る。埋土は暗灰茶褐色を呈す。底面で20～50cm前後の柱穴が多数と、幅20cm、深さ10cm前後の溝を検出した。出土遺物(第22図269～277)。269と270は越州窯系青磁碗で、270は胎土・焼成とも良好である。271は須恵器碗、272は土師碗で内面はミガキの後にナデを施すなど丁寧な調整である。273・274は滑石製品で、273は錘である。274は石鍋を再利用した未製品で、石鍋として使用していた時の補修用の釘が残る。275は砂岩製の砥石、276・277は須恵質の平瓦である。凸面は2両方とも斜格子のタタキで、凹面には布圧痕が残る。10～11世紀と考えられる。

SK3022(第19図) 3面の南西端に位置する。遺構の大半が調査区外であるが、現状で東西1.5m、南北65cmを測る。掘方断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは1.1mを測る。埋土は茶褐色を呈す。出土遺物(第20図231～233)。231は黒色土器A類碗、232は土師碗、233は須恵質の平瓦である。遺構の時期は他の出土遺物などからも10世紀頃と考えられる。

#### 4) その他の出土遺物(第24図284～301)

284～293は1～2面間掘り下げ時に出土した遺物である。284は白磁碗で外面に連弁がつく。285・286は瓦質の火鉢、287は瓦質の獣足である。288は棒状の土製品で断面は半円形を呈す。平坦面は高熱で被熱して灰白色を呈し、側面は一部赤褐色を帯びる。炉材に使われたと思われる。289は土錘、290は土鈴、291は猿型の土製品である。292・293は須恵質の平瓦である。294～296は2～3面間掘り下げ時に出土した遺物である。294は白磁碗で外底面に墨書がみられる。295は須恵器高台付坏、296は須恵質の平瓦である。297は試掘時に出土した須恵質の平瓦である。焼成は良好で端部は切り離し後にナデを施すなど、調整は丁寧である。298～301は古墳時代以前の遺物で298は須恵器甕、299は土師器甕、300は土師器器台である。301は円筒埴輪の下端と思われる。外面は淡黄褐色、内面は暗褐色を呈す。胎土中に白色砂を多く含む。焼成は良好である。

## 4 小結

188次調査では調査面積が狭いこともあって、街割りや屋敷内の区画などを確認することはできなかった。今回の調査の目的のひとつに西隣の118次調査区で検出した13世紀末から14世紀前半の溝であるSD024の続きを確認することがあったが、残念なことにこれも確認することはできなかった。これは溝が北側隣地との境界近くを通っているため、敷地北端の残地内に入ってしまった可能性や、今回の調査区では近現代攪乱によりSD024が確認された標高近くまで削平を受けていたため、攪乱によって消滅した可能性、または188次と118次調査区の間で溝が立ち上がる可能性が考えられる。

また、当調査地点周辺では近世後半から明治にかけて19軒の窯業生産者が操業していた。特に東側隣地では博多人形の製作が行われており、北側隣地の117次調査区では多くの人形の破片の他に鋳型や生産具などが出土している(『博多76』福岡市埋蔵文化財調査報告書第667集)。今回の調査においても近世から近代にかけての土坑などを確認しており、陶器類や瓦片など多くの遺物とともに人形片などが出土しているが、鋳型などの窯業生産に関連する明確な遺物は確認できなかった。

図版 1



1. I区1面（南から）



2. I区2面（東から）



3. I区3面（南から）



4. II区1面（北から）



5. II区2面（南から）



6. II区3面



1. SE1019 (南から)



2. SE1019 竹筒痕跡 (西から)



3. SE1053 (南から)



4. SE1053 土層 (南東から)



5. SE1053 井筒下層遺物出土状況



6. SE2017 (東から)

図版 3



1. SK1002 (西から)



2. SK1020 (南から)



3. SK1020 土層 (北東から)



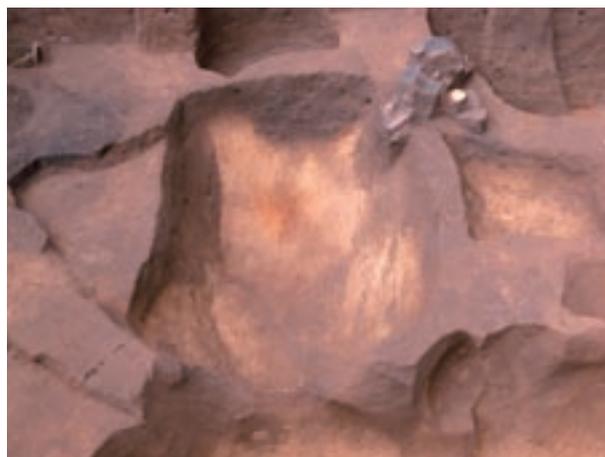
4. SK1054 (西から)



5. SK1001 (2009) (南から)



6. 調査区南壁土層 (北から)



1. SK2001 (東から)



2. SK2001 土層 (西から)



3. SK3003 (東から)



4. SK2029 (西から)



5. SK2029 土層 (北から)



6. SK2029 遺物出土状況 (西から)

図版 5



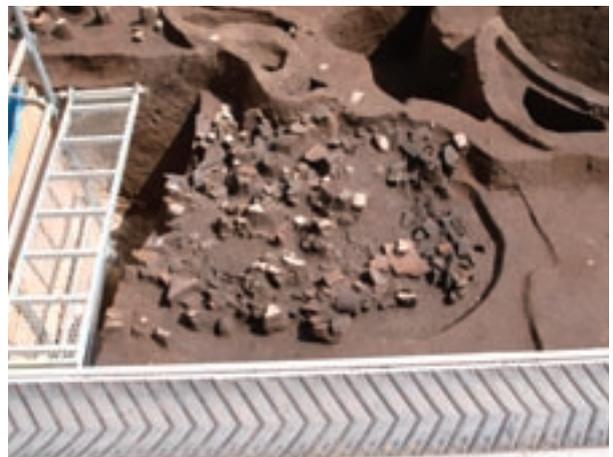
1. SK3006 (南東から)



2. SK3018 (北西から)



3. SK3021 (東から)



4. SD1021 (西から)



5. SD1024 (西から)



6. 調査区東壁土層

# 報告書抄録

ふりがな	はかた							
書名	博多142							
副書名	博多遺跡群第188次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1125集							
編著者名	屋山 洋							
編集機関	福岡市教育委員							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	2011年3月18日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東緯	発掘期間	調査面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
はかたせいせきぐん 博多遺跡群 だい188じちようき 第188次調査	はかたくれいせんまち 博多区冷泉町 86番地、87番地、 88番2	40132	0860	130° 24′ 43″	33° 35′ 35″	20090224 ) 20090415	112m <sup>2</sup>	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
博多遺跡 第188次	集落	古墳時代前期	土坑 (自然の窪みかも)	土師器		近世には近隣に 博多人形の窯が あった。		
		古代～近世	井戸 土坑 溝	貿易陶磁、近世瓦				
要約	博多遺跡群の南西端部に位置する。現地表下2m近くまで攪乱で削平されている。遺物は弥生時代や古墳時代前期の土器片が出土しているが、確実な遺構は確認できなかった。確実な遺構は10世紀後半の土坑と柱穴状遺構で、11世紀後半になると遺構の密度が高くなる。中世の井戸・土坑・溝や近世の井戸・土坑が出土した。							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1125集

## 博多142

— 博多遺跡群第188次調査報告 —

2011年（平成23年）3月18日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 有限会社プリコム  
福岡市博多区冷泉町1-20  
(092)282-5321









